

# 第6回 福岡県グローバル青年の翼

Think Globally, Act Locally

## 2024.報告書



編集 福岡県グローバル青年の翼実行委員会事務局  
〒812-8577 福岡市博多区東公園7番7号  
福岡県人づくり・県民生活部私学振興・青年育成局青少年育成課内  
Tel. 092-643-3402

発行 2025年3月  
印刷 株式会社 博多印刷

## 第6回

# 福岡県グローバル青年の翼 2024

## 報告書

### Contents

知事あいさつ	2
事業概要	3
団員名簿	4
第1次研修	5
第2次研修(自由研究)	6
第3次研修	7
第4次研修(海外研修)	8
第5次研修	21
副知事表敬訪問	22
団員レポート	23
アドバイザーレポート	33
事務局から一言	34
募集要項	35
SnapShots with Message	37
Special Thanks to	42



### 国際的な視野を持ち、 地域で活躍する人財の育成を目指して

福岡県知事 服部 誠太郎

近年、人口減少・少子高齢化や急速に進むデジタル化、新型コロナのパンデミック、エネルギー価格や原材料価格の高騰など私たちを取り巻く環境は大きく変化しています。こうした中、世界の動きや社会のニーズを的確にとらえ、新たな発想で先駆的に取り組むことができる人材が求められています。

これからの福岡県、そして日本の発展を考えると、“Think globally, act locally”、国際的な視野を持ち、地域で活躍する「人財」の育成が必要です。

このため県では、躍動するアジアの現状を体感し、現地で活躍する人たちとの交流などを通じて、グローバルな視野を備えた青年リーダーを育成する「福岡県グローバル青年の翼」を実施しています。

今年度は18人の若者たちが、県内の研修において各々の考える課題を設定した上でカンボジアとシンガポールを訪問されました。現地においては、現地の政府関係者や日本の国際機関を訪ね、貴重な意見交換を行ったほか、現地の児童・若者との文化交流、また現地に根差す福祉団体のボランティア活動に参加するなど、多種多様な経験を積み自ら設定した「人材育成・教育」「観光・食」をテーマに自主研究活動を深めてこられました。

これらの経験は、団員の皆さんにとって貴重な体験であり、かけがえのない財産になったことと思います。これから団員の皆さんが、この「福岡県グローバル青年の翼」で学んだことを糧に、地域の青年リーダーとして活躍されることを、心から期待しています。

県では、県政推進の柱として「次代を担う『人財』の育成」を掲げており、さまざまな体験を通じて能力を磨き、未来に大きく羽ばたこうとする青少年のチャレンジを全力で応援してまいります。

結びに、本事業の実施にあたり、ご尽力いただいた福岡県グローバル青年の翼実行委員会をはじめ、関係の皆さまに心から感謝申し上げます。

## 1 趣旨・目的

県内青年に、世界(アジア)を舞台に県内の企業や自治体が活躍している現状を体感、認識させることで、国際的な視野を持ち、職場や団体等の中核的存在として地域で活躍できる人材を育成する。

## 2 概要

(1) 団員 18名(内訳:社会人5名、学生13名)

(2) 研修内容

① 第1次研修(宿泊) 9月21日(土)～22日(日)	国際NPOの海外展開・アジアを取り巻く現状等、外国人研修生との交流
② 第2次研修(自主研究) ①と③の間	テーマ班ごとに関連する県内企業・団体・訪問先等の研究等
③ 第3次研修(通所) 10月19日(土)～20日(日)	訪問国や訪問先に関する講義・英語スピーチ指導等
④ 第4次研修(海外研修) 11月7日(木)～14日(木)	現地企業や教育機関、文化施設の視察、現地で活躍する日本人との交流等
訪問先	カンボジア・シンガポール
⑤ 第5次研修(宿泊) 12月7日(土)～8日(日)	研修の成果発表等

(3) 参加資格 2024年4月1日現在で、満18歳以上35歳以下の福岡県にゆかりのある人(企業・大学・青少年団体・NPO団体・自治体等に所属する者で、国際的視野を身につけ企業・団体等の中核となって活躍する青年リーダーを目指す者)

(4) 実施主体 福岡県グローバル青年の翼実行委員会  
(福岡県、福岡県青少年団体連絡協議会、(公社)福岡県青少年育成県民会議、(公財)福岡県国際交流センター、(公財)オイスカ西日本研修センター、NPO法人ふくおかNPOセンター、福岡県青年の会、JETRO(日本貿易振興機構福岡貿易情報センター))

## 第6回 福岡県グローバル青年の翼(2024) — 団員名簿(生活班別)

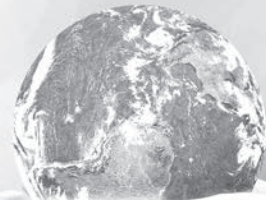
### 1 班

氏名	所属・職業	役割	テーマ別
あおき りか 青木 里花	社会人 福岡女学院大学	記録/報告書編集	人材育成・教育
やまもと かりん 山本 夏鈴	学生 福岡女子大学	企画	人材育成・教育
えのもと まこ 榎本 真子	学生 福岡大学	企画	人材育成・教育
かまちと いちか 釜本 一花	学生 福岡女学院大学	記録/報告書編集	観光・食
みやもと ゆい 宮本 結衣	社会人 株式会社福岡銀行	サブリーダー	人材育成・教育
なかしま はるき 中嶋 陽貴	学生 福岡大学	記録/報告書編集	観光・食
いじり ひでのり 伊尻 秀徳	学生 九州大学	サブリーダー	観光・食
わたなべ ゆうか 渡邊 裕加	社会人 株式会社共栄ビル・パートナーズ	リーダー	人材育成・教育
あべ エリカ 安部 エリカ	学生 西南学院大学	企画	観光・食
いしばし あきほ 石橋 紀歩	学生 九州大学	記録/報告書編集	観光・食

### 2 班

氏名	所属・職業	役割	テーマ別
やまもと たけし 山本 健志	学生 九州大学	企画	観光・食
グエン ティ ディエム トゥイ NGUYEN THI DIEM THUY	社会人 松本工業株式会社	企画	人材育成・教育
たんげ さき 丹下 紗希	学生 熊本大学	記録/報告書編集	人材育成・教育
なかせ ゆうた 中瀬 雄大	学生 福岡大学	サブリーダー	人材育成・教育
すえよし こたろう 末吉 鼓太郎	社会人 株式会社福岡銀行	リーダー	観光・食
みやもと みさき 宮本 美咲	学生 山口大学	サブリーダー	人材育成・教育
はしもと もえか 橋本 萌花	学生 佐賀大学	記録/報告書編集	人材育成・教育
さえき ゆきほ 佐伯 幸歩	学生 立命館アジア太平洋大学	企画	人材育成・教育

# 仲間との出会いと学びの2日間



於：オイスカ西日本研修センター 9月21日(土)～9月22日(日)

オイスカ西日本研修センターにて、1泊2日の第1次研修が行われた。オイスカ西日本研修センターでは、海外の青年が地域活性化の牽引役となるために、農業研修を中心とした人材育成が行われており、現在13名の研修生が農業を学んでいる。

## 1日目

初日はオイスカの研修生との交流から始まった。研修生による自己紹介・自国紹介の後、食堂にて3カ国(フィリピン、東ティモール、チベット)の料理を作り、昼食をとった。最初は緊張していたが、お互いを知ろうと積極的にコミュニケーションを取るうちに、緊張はほぐれ、研修生も団員も笑顔で会話を楽しんでいた。

午後は二つの講義を受講した。

最初はOVER THE RAINBOW代表の荒牧明楽氏による、人間の「無意識の思い込み(アンコンシャス・バイアス)」に関する講義である。偏見や決めつけが物事の見方や捉え方に影響することを理解し、意識した言動をとることで、多様な人材が活躍できる社会に繋がることを学んだ。

続いて、日本財団の野見山瞳氏と森祐次氏から「カンボジアにおける日本財団の国際協力や海外研修の心構え」について伺った。野見山氏によるポル・ポト政権後の教育支援の説明では、後の研修で訪れるカンボジアと自国の繋がりを認識した。森氏からは、長年の海外経験を踏まえたアドバイスと、県の代表としての自覚と責任感を持ち研修に臨むことを期待するお言葉をいただいた。

講義後は農業体験で野菜の種まきを行った。手作業による種まきには集中力が必要であった。その後は栗拾いにも挑戦した。実を出すのは苦労したが、とげの中から茶色の大きな実が見えた時の喜びは大きく、夢中になっていた。自然に恵まれた環境だからこそその貴重な体験であった。

夜の懇親会では、班を超えた交流も見られ、団員同士の距離がさらに縮まった。にぎやかな夜の終わりを惜しみながらも、明日の活動に向けて就寝した。

## 2日目

雨により室内での朝の集いとなったが、研修生とラジオ体操を行い、新鮮な気持ちで一日のスタートを切った。

午前中は海外研修に向けた活動が中心であった。昨年の団員である5名のアドバイザーから活動報告や助言を受けた後、今後訪問する予定であるカンボジアの児童養護施設や大学での企画の検討に移った。スムーズに意見を出し合うことができ、方向性が定まった。午前中の最後は、入国手続きに係る準備を行った。記入ミスがないように確認しながら、ビザの申請書類をそろえた。海外研修が現実味を帯び始め、楽しみと同時に成功させたいという思いが強まり、準備や話し合いに熱が入った。

午後は二つの講義を受講した。

1つ目は九州産業大学准教授の豊島茂氏による講義で、消費者意識や観光目的の変化と九州経済にとっての観光の重要性を学んだ。地元九州・福岡のインバウンドの動向や事例を確認し、地域理解が深まった。

2つ目は、ビジネスデザインラボ代表の神田橋幸治氏による、社会課題の発見とその解決(ソーシャルビジネス)について考える講義であった。身近な問題が解決しない原因こそが社会課題であり、継続的に取り組める解決策が必要であることを理解した。

講義を受け終え、2日間の研修は終了した。今後の研修に繋がる知識を習得しつつ、団員同士の親睦を深めることもでき、収穫の多い研修となった。

(文責：山本 夏鈴)

## 講義名・講師

- ・「企業におけるダイバーシティ&インクルージョン、アンコンシャス・バイアスについて」…………… 荒 牧 明 楽 氏 OVER THE RAINBOW 代表
- ・「日本財団における国際協力とは」…………… 野見山 瞳 氏 公益財団法人日本財団国際事業部
- …………… 森 祐 次 氏 公益財団法人日本財団 常務理事
- ・「九州および福岡県の観光動向と展望」…………… 豊 島 茂 氏 九州産業大学地域共創学部 准教授
- ・「社会活動&ビジネスの新潮流 - ビジネス視点で社会課題と向き合う -」 神田橋 幸 治 氏 ビジネスデザインラボ 代表



野菜の種まき体験



海外研修の企画検討



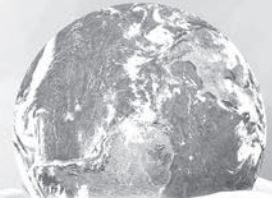
講義中のグループワーク



研修生との会話を楽しむ団員



# 海外研修目前、最後の仕上げ



於：福岡県千代合同庁舎 10月19日(土)～10月20日(日)

第3次研修は「福岡の魅力と課題」、そして「海外研修に向けた準備」を整える貴重な機会となった。

## 1日目

まず、IKKYU合同会社のAldo Bloise氏、合同会社みずトランスコーポレーションの水谷みずほ氏による「海外から見た福岡の魅力と課題」についての講義が行われた。福岡はコンパクトな都市でありながら、生活の質が非常に高いことが強調された。家賃が安く生活費も抑えられ、更には交通の便も良いため、人々が移住しやすい環境が整っていること。また、美しい自然が都市と調和していることも福岡の魅力の一つとして紹介され、スタートアップ企業やIT企業の進出が増加しているなど、福岡には今後の成長する可能性が広がっている面も紹介された。一方で、指摘された福岡が抱える課題は「英語を話せる人材が不足している」ことだ。勿論、福岡県だけではなく日本全体の課題でもあるが、国際的な都市として成長しつつある福岡がその魅力を広く発信し、外国人との交流を深めるためには、英語ができる人材の育成が急務であると感じた。

続けて英語スピーチの指導を受けた。各団員が準備したスピーチを発表し、発音や抑揚、発表原稿に至るまで、細かいフィードバックを受け、スピーチの伝わり方や効果的な話し方について学び、英語でのスピーチ力を向上させる貴重な機会となった。その

後、JICA九州の後藤伸也氏から「青年の翼事業OBとして、JICAとして」の講義を受け、さらにはN-SYSTEMSの長根寿陽氏から「途上国で『今できること』、『将来したいこと』」についての講義とワークショップがあり、途上国での活動に対する意識が高められた。

## 2日目

カンボジアでの大学生や孤児院の子どもたちとの交流企画に関するグループワークを行った。この企画では、「いかに楽しく、有意義な時間を提供するか」という点を最も重視し、具体的な案を出し合いながら企画を検討した。異文化交流を目的とした企画であるため、言葉の壁を越えて楽しく交流するための方法を考えたとき、お菓子作りやダンスなど、言語に依存しないコミュニケーション方法を取り入れることで、全員が楽しみながら参加できるのではないかと考えた。このワークショップを通じて、異文化理解の大切さや難しさ、実際に現地でもどのように交流するかを具体的に考える貴重な経験となった。

結団式では団長からの温かいお言葉を受け、改めて福岡県を代表して研修に参加する責任の重さを実感した。海外研修を目前に控え、期待と不安が入り混じる中、今後の研修に向けてモチベーションが高まった。

(文責：末吉 鼓太郎)

### 講義名・講師

・「海外から見た福岡の魅力と課題」	}	Aldo Bloise 氏	IKKYU合同会社 創業者
・「英語スピーチ、伝わる英語指導」			
		水谷みずほ 氏	みずトランスコーポレーション 代表 (一社)九州通訳・翻訳者・ガイド協会 会長
・「青年の翼OBとして、JICAとして」	後藤伸也 氏	独立行政法人国際協力機構JICA九州 企業連携課 課長	
・「途上国で『今できること』、『将来したいこと』」	長根寿陽 氏	N-SYSTEMS株式会社	



カンボジアでの企画を検討



講義とワークショップで課題意識を高める団員

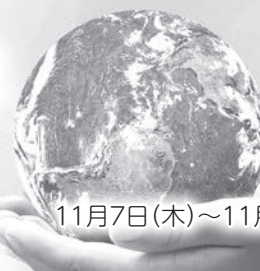


英語スピーチ指導を受ける様子



2次研修の総括も実施

## 第4次研修(海外研修) 日程表



11月7日(木)~11月14日(木)

日程	場所	時刻	内容
DAY 1	11月7日 THU	福岡空港	7:30 出発式
		福岡発	9:45
		シンガポール着	15:20
		シンガポール発	16:50
		プノンペン着	17:55
			プノンペン泊
DAY 2	11月8日 FRI	プノンペン	8:30 ○日本大使館訪問
			10:00 ○カンボジア農業省
			11:00 ○キリングフィールド視察
			11:40 ○イオンモールプノンペン3号店視察
		プノンペン発	13:10 シェムリアップへ移動
			シェムリアップ泊
DAY 3	11月9日 SAT	シェムリアップ	5:20 ○アンコールワット朝日鑑賞&遺跡内観光
			9:30 ○アンコールトム観光
			11:00 ○タ・プローム見学
			15:00 ○アキ・ラー地雷博物館
			18:30 ○アンコールアイ
			シェムリアップ泊
DAY 4	11月10日 SUN	シェムリアップ発	9:00 ○地元マーケット訪問・移動
		バタンバン着	12:00
			12:00 OCAFE HOCにて昼食・交流 ○孤児院HOC(Hope of Children)にて交流活動
			バタンバン泊
DAY 5	11月11日 MON	バタンバン	9:00 OBTECバタンバン教育養成コースの学生と交流・視察
		バタンバン発	13:00 シェムリアップへ移動
		シェムリアップ着	20:30 ○ナイトマーケット視察
			シェムリアップ泊
DAY 6	11月12日 TUE	シェムリアップ発	10:40
		シンガポール着	14:15
			16:00 ○JETRO訪問
			19:30 ○シンガポール県人会との夕食交流会
			シンガポール泊
DAY 7	11月13日 WED	シンガポール	9:00 ○シンガポール市内視察へ
			14:00 ○The Food Bank Singapore Ltd社到着 フードバンク・ボランティア活動(説明・梱包・配給等)
			機内泊
DAY 8	11月14日 THU	シンガポール発	1:20
		福岡着	8:10
			解散

# 国内研修を経ていざ海外へ!



カンボジア 11月7日(木)

第3次研修を終えて、いよいよ海外研修の日がやってきた。国内研修で学んできたカンボジアやシンガポールの経済動向や国際協力について、身をもって体験できる日が来ることに胸が踊った。

当日は朝7時15分に福岡空港に集まった。出発式では団長の気の引き締まる挨拶と添乗員の方の説明で海外研修の実感がじわじわと湧いた。預け手荷物の控えを忘れないようにアナウンスされたあと、すぐに私は控えを忘れそうになったが、周囲に気付いてもらい何とか飛行機に乗り込んだ。

プノンペンまではシンガポール空港での乗り継ぎを経て合計約8時間のフライト。機内では映画を見たり機内食を楽しんだりした。シンガポールからプノンペンまでの機内食ではスティック状の牛乳が出てきたり、日本語が書かれたデザートが提供されたりと新鮮な体験だった。そしてカンボジアに到着! 去年はロストバゲージが発生したと聞き心配していたが、今年は無事に全員の荷物が揃った。プノンペンの街は夜でも気温が高く、また街中にも活気に満ちており、イメージしていたカンボジアと大きく違っていた。空港で出迎えてくれたN-SYSTEMSの長根氏によると、街中で走っている車は日本よりも金額が高い車が多いとのこと。カンボ

ジアではローンではなくキャッシュでないと車を買えないため車の利用者は富裕層が多く、一般的にはバイクが広く流通しているそうだ。移動中バスから見える街中には3人乗りや4人乗りをしているバイクもあり、面白味を感じた。最初の夕食会は中華料理店にてカンボジア農林水産省のポトラー国務次官と歓談しながら行われた。見たことのない料理もあったが、長時間のフライト後であり、どれも身に染みた。また、翌日に農業省の訪問を控えていたこともあって、農業以外の話もしようというポトラー国務次官の意向で、ご家族の話や来日した際の話で盛り上がった。久しぶりに英語で会話をする私にとって、少し緊張もあったが、ポトラー国務次官はとても気さくな方だったこともあり、翌日の訪問にさらに期待が高まった。

夕食後、向かったホテルの入り口には中国系の仏壇らしきものが飾られていた。中国語の看板も多く、カンボジアでの観光客の多さや影響力を感じることができた。移動がほとんどの一日だったが、思っていた以上に疲れていたようでその日はあっという間に熟睡していた。

(文責:宮本 結衣)



スティック状の牛乳



カンボジア初めての夕食



団員の質問に答えるポトラー国務次官



カンボジア到着後の記念写真



ホテルの入口にあった中国系の仏壇らしきもの

# 在カンボジア日本大使館訪問を経て —カンボジア農林水産省訪問—

在カンボジア日本大使館／カンボジア農林水産省 11月8日(金)



## 在カンボジア日本大使館

カンボジア2日目の午前中、私たちはプノンペンにある日本大使館を訪れた。大使館の警備は厳重で、それだけ厳格な施設なのだと気を引き締めた。建物の内部に入る際も、ドアとドアの間に狭いスペースがあり、まず団員の半分が入室。彼らの入室後、もう半分の団員も同じように入室した。スマートフォンなどのデバイスも持ち込むことができないため、メモと筆記用具、という最低限の荷物を持って臨んだ。

大使館では、農林水産省出身の書記官である聖川氏が迎えてくださり、大使館業務に加え、地雷や農業に関する話をはじめとした、たくさんの貴重なお話を聞かせていただいた。個人的に大使館は国を代表する公館としてのイメージが強く、政府間でのやり取りが多いのだろうと思っていたが、決してそれだけではなかった。現地の農業の現状や課題に関しての詳しい部分も教えていただき、地域とも密接に関わる仕事なのだと驚いた。

具体的には、カンボジアで生産されたカシューナッツが、その加工をベトナムに任せていることで、「made in Vietnam」として売り出されてしまうことや、地雷を撤去した後の跡地の活用方法等が現在のカンボジアの農業における課題であること、また、カンボジアの上水道の整備には北九州市が関わっているなど、日本とカンボジア、福岡とカンボジア間に繋がりがあることも分かった。

今回の話を通じて、自分はまだ全然カンボジアについても、日本についても知らないことだらけであること、双方についてもっと理解する必要があることを実感した。

## カンボジア農林水産省

日本大使館の後は、向かいのカンボジア農林水産省へ。招待されたのはなんと国際的な会談にも使用されるという大きな会議室。ニュースでしか見たことのないマイク付きのデスクに座り、前日のディナーとは打って変わったオフィシャルな空間でのボトラー国務次官との面会に緊張した。

ボトラー国務次官からは、政府から見たカンボジアの農業の現状をご説明いただいた。大学で農業を学んできた私にとって、発展途上国の現場の政府高官から直接お話を聞くのはかつてないほど実践的な機会だった。中でも面白かったのは、カンボジア原産米の輸出PRとカシューナッツのバリューチェーンについてのトピックだ。まだまだ農業インフラや生産技術が発展していないカンボジアの現状は、日本とは大きく異なっていた。しかし、日本企業の現地貢献の話なども聞き、農業分野の開発支援について自身の知識も活かせるのではないかという手ごたえもあった。その後、私たちからの質問にも答えていただき、さまざまな課題を抱えながらも自国の農業発展に熱く向き合うボトラー国務次官の姿に、大変感銘を受けた。

日本でのこれまでの学びが生きた瞬間であり、現地に來たからこそこの学びも得ることのできた、充実した時間だった。

(文責:安部 エリカ・山本 健志)



在カンボジア日本大使館にて聖川氏と記念写真  
※大使館の許可のもと撮影



農林水産省の広い会議室での対談に緊張



ボトラー氏と記念撮影

# 争いの上に紡がれる平和の礎 ～カンボジアでも活躍する日本企業

キリングフィールド／イオンモールプノンペン3号店 11月8日(金)



団員一行は、キリングフィールドへ向かった。第1次研修の際の野見山氏の講義の中で、カンボジアではクメール・ルージュ（かつて存在した政治勢力及び武装組織）によるカンボジア人大虐殺が行われたことを学んでいた。その処刑場こそが、今回訪れたキリングフィールドだ。現地ガイドの話によると、元々は中国人の墓で、その跡が残っている場所もあった。キリングフィールドへ足を踏み入れた瞬間、真夏のような暑さが一瞬で冷たい空気に包まれたようにも感じ、団員の表情も引き締まった。

まずは一人ずつ献花を行い、犠牲者の頭蓋骨と虐殺に使用された道具が置かれる場所を一周しながら犠牲者への弔いと平和を祈った。当時のキリングフィールド内では、やけに陽気な、それでいてどこか不気味な音楽が流れていたそうだ。ガイドによると、ここに連れてこられた人たちが後に殺されることを外部に悟られないようにするためのことだ。他にも、殺すための道具は音が響かない素材で作られていたとも。幼子を叩きつけて殺すのに使われた木もあり、涙ぐむ団員もいた。人はここまでおぞましくなれるのかと悲しみや怒りを覚え、改めて平和の大切さを学んだ。一方で、過去の大量虐殺を知らない現地の子どもたちも多いと知り、歴史教育について考えさせられた。

その後、昼食のためイオンモールプノンペン3号店に向かった。事前研修で、日系企業がカンボジアに多く出店していると聞いていたが、実際に訪れると予想以上に日本食レストランが多く、寿司やしゃぶしゃぶ、ちゃんぽんといった日本料理が当たり前になり、様子は日本のショッピングモールのような感じだった。私自身、現地に行く前は「現地の料理だけを食べる」と意気込んでいたが、香辛料が口に合わず、日本料理が異国の地で安心感を与えてくれる存在であることに気づいた。日本食レストランは、単に日本の食文化を広めるだけでなく、海外で暮らす、あるいは旅行中の日本人にとって「安否の場」としての役割も果たしていると感じた。

レストランでは浴衣を着た現地スタッフが接客するなど、日本の文化が現地の人々に広がっている様子が興味深かった。日本企業の進出は、サービスだけでなく、現地の人が日本文化や価値観に触れる機会をも提供しているのだと思った。

日本のイオンモールとの違いについても、いくつかの点に目がついた。特に印象的だったのは、入店している店舗の扱う商品の価格帯だ。ここでは、ブランド品を扱う高価格帯の店が多く出店しており、一部の富裕層や外国人の需要を意識しているように思えた。個人的に面白いと感じたのが、洋服店で冬服が売られていたことだ。一年中暖かい気候のカンボジアで、分厚い長袖の服やコートが売られている光景には驚いた。これが単なる外国人観光客向けなのか、一部の人々が海外旅行やファッションとして購入するのかわからないが、気候や文化と異なる商品が売られているのも興味深い現象だった。

さらに、モール建設による土地価格の高騰についても耳にした。元農地だった地域の地価が2000倍になったという話は、開発が地域経済に与える影響の大きさを実感させた。一方で、急激な変化が地元住民にどう影響するかも気になった。

イオンモールのような商業施設は、買い物の場としてだけでなく、地域社会や経済、文化交流において重要な役割を果たしていると感じた。

昼食と買い物を終え、プノンペンからシェムリアップへ移動した。その途中、トイレ休憩に寄り道したところ、なんと、外の店で虫料理を売っていた。コオロギ、イモムシ、タランチュラの料理が売られており、数名の団員が挑戦していた。コオロギを食べた団員によると、「エビフライの尻尾を食べているみたい」とのこと。調理後よりも、生きたタランチュラの方が何倍も大きく少々戸惑ったが、そのタランチュラを手に乗せている団員もいた。

(文責：橋本 萌花・佐伯 幸歩)



祈りがささげられている木



当時の遺骨が並ぶ



改めて平和の大切さを再認識する団員一同



広大なイオンモール



日本食の店舗も



日本でも馴染みの店舗が多い印象

## アンコール遺跡群の魅力

アンコール遺跡群 11月9日(土)

3日目には、アンコール遺跡群を訪れた。朝、5時頃にホテルを出発し、まずは朝日が昇るタイミングで綺麗に映えるアンコールワットを見に行った。日の出が6時頃と予想されていて、早い時間帯なのであまり観光客はいないと思われたが、予想に反し、たくさんの観光客が朝日を見ようと集まっていた。朝日が昇ると、アンコールワットの間に差し込む光が幻想的でとても印象的だった。

アンコールワットはカンボジアにある世界的に有名な寺院で、クメール王朝の時代に作られた。ほとんどの寺院は東向きだが、アンコールワットは特殊で西向きに建てられている。これは「東で生まれて西に沈む」という表現に則っている。なぜなら、アンコールワットは王の墓だからだ。死と再生を意味し、王の霊が西に向かって安らかに眠ることを意図して建てられた。高さ約65m、東西約1500m、南北約3000mという迫力満天の遺跡で、団員一同圧倒されていた。

次に、アンコールトムを訪れた。クメール語で「大きな都市」という意味を持つ。東西南北に仏像の顔が配置されており、荘厳な雰囲気が見受けられた。また、門には阿修羅と神々の石像が左右に1列に配置され、それぞれが蛇神であるナーガの長い胴体を綱引きのように引き合っている。入口からも威厳を感じる造りでとても魅力的だった。

また、壁には王の戦いの様子などが描かれているが、これは、当時の王権や戦争について示している。どこの壁画を見ても、びっしりと当時の様子分かるような彫刻がされており、1つ1つ観察するのが楽しかった。

一つ新鮮だった点を挙げると、アンコール遺跡群を訪問するにあたって、入場チケットが必要であったが、その入場チケットを買う場所がアンコールワットから少し離れた場所にあったという点だ。日本では通常、観光地に入る為の入場チケット売り場は、観光地入り口近くに併設されているパターンがほとんどである。しかしアンコール遺跡群はチケット売り場を少し離れた場所に設置している事で混雑解消に繋がっていると感じた。

またアンコール遺跡群に入った後、日の出まで少し時間があつたので遺跡内の売店を巡る事にした。売店を歩いていると売主から日本語が聞こえてくる。私達を見て日本語で話しかけてくれた。流暢な日本語で商品と値段の説明をしてくれた。聞けば、アンコールワットを訪れる日本人は多く、日本人に商品を売るために独学で日本語を勉強したそうだ。そして同じ様に日本語を話す売主が他にも沢山いる事を教えてくれた。カンボジアの方々の勤勉さに驚いた瞬間だった。

(文責:中嶋 陽貴・釜本 一花)



朝日を待ち構える観光客



繊細な彫刻



シルエットにも圧倒される

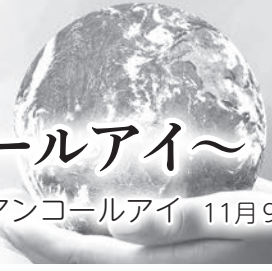


ナーガで綱引きをする像が左右に並ぶ

# 過去から未来へ

## ～アキ・ラー地雷博物館とアンコールアイ～

アキ・ラー地雷博物館&アンコールアイ 11月9日(土)



### アキ・ラー地雷博物館

シェムリアップ郊外にある、地雷撤去活動家のアキ・ラー氏が運営している小さな博物館を訪問した。彼は両親をクメール・ルージュに殺され、わずか10歳にして少年兵となった。終戦後、足を失った人々を目の当たりにし、償いとして自身が埋めた地雷を撤去しているとのこと。

博物館は個人経営であるが実際に撤去した地雷はもちろんのこと、クメール・ルージュ時代の兵士の写真や虐殺を表す絵などが展示されており、当時の悲惨さを目の当たりにした。

当日は運良くアキ・ラー氏ご本人が博物館におり、地雷について様々な説明をしていただいた。対人地雷自体はあまりにも小さく、普段生活している地面に埋まっても全く気づかないほどの大きさだった。

最後に、昔日本で放映されたテレビ映像を紹介いただいた。アキ・ラー氏が地雷被害を受けた子どもたちと一緒に暮らしている様子や地雷撤去の様子が写っており、14時間以上かかる撤去作業には息をのんだ。同氏がこれまでに撤去した地雷は50000個にのぼり、その数の多さに驚いたと同時に、これだけ撤去しても残りの地雷を撤去するまでに100年以上もかかるのかとやるせなさを感じた。

アキ・ラー氏の「いくつか撤去しても罪の意識が消えることはない」という言葉を聞いて、今までカンボジアの地雷について考える時は、足や腕を失った被害者のみに意識が向かっていたが、今回の

訪問で、地雷を埋めた少年兵達もポル・ポト政権の被害者であることをまざまざと感じた。

テレビ映像の中で登場した当時の子どもたちの中には、その後大学に行ったり結婚したり、20名ほどが自立していったと聞き安心した。

### アンコールアイ

博物館訪問後は宿泊ホテル近くにある観覧車「アンコールアイ」を訪れた。

かつて北九州市のスペースワールドにあった観覧車スペース・アイをカンボジアに持ってきたとのこと。アンコールワットの景観を守るためにカンボジアには建物の高さ規制があり、観覧車はこの高さを超えているそうだが「鉄骨であり建設物ではない」という理由で海を渡って復活した。いかにも海外らしい理由に笑ってしまった。

訪問直前まで修理中で、観覧車の運営はストップしていたそうだが、今回の私たちの訪問に合わせて営業を再開していただいた。実際に観覧車に乗り、カンボジアの街全体を眺望することができた。説明があった通り、観覧車から見える景色の中にアンコールワットより高い建物はなく、この日は天気も良かったため、4.5km先にあるアンコールワットの先端を確認することができた。赤い屋根の建物と丸い樹木が印象的であった。

(文責:青木 里花)



アキ・ラー氏と集合写真



アキ・ラー氏ご本人から説明を受ける団員

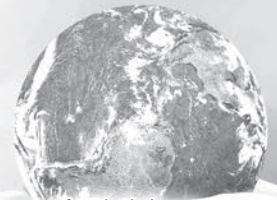


虐殺の様子を表した絵



観覧車の前でジャンプ!

## Hope of Childrenをたずねて



移動(シエムリアップ→バタンバン)&amp;Hope of Children 11月10日(日)

研修4日目、バタンバンにあるHope of Children(以下HOC)を訪れた。HOCは1992年に仏教僧侶のムニ氏が創設した児童養護施設で、現在は福岡県出身の岩田亮子さんが実質的に運営している。ネグレクトやエイズの被害を受けた子どもたちや、貧しくて教育を受けられない子どもたちを中心に受け入れており、衣食住・教育などを提供したり、将来役立つ技術を教えたりすることで、子どもたちが社会で自立して生活ができることを目標に活動されている。また、施設から少し離れた場所でCAFE HOCを運営しており、HOCの高学年の子どもたちが料理を作り、提供している。CAFE HOCではHOCの農園で育てた無農薬の野菜や果物を使って料理提供しているほか、環境にも配慮して運営されており、繰り返し使える金属ストローの導入や、お手拭きに使い捨てでないタオルを利用するなど工夫されていた。

当日、私たちは料理と遊びの二本立ての活動を計画していたが、実際に行ってみると子どもたちが料理や遊びの提案を次々にしてくれて、臨機応変に対応する形となった。料理は昨年の団員の方が持っていったたこ焼き機を使ってのたこ焼き作りと、私たちの持ってきた焼きもちをすることになり、HOCの子どもたちと交流しながら料理作りを楽しんだ。また、日本語が堪能な子が通訳の役割を率先して担ってくれたおかげで、活動の交流のみにとどまらず言葉での交流も行うことができた。日本語がまだ話せない子どもでも、ジェスチャーなどのボディランゲージを用いて意思疎通を図ることができ、伝えたいことが伝わったときの嬉しさは計り知れなかった。中・外遊びはHOCで普段遊んでいる遊びに参加させてもらったり、日本から持っていった大縄で新しい遊び方を考えたりと、いくつかのグループに分かれて活動した。外に出てエネル

ギッシュに遊ぶ子もいれば、会話を楽しみながら折り紙を折ったり、黙々とけん玉の練習に励んだりする子もいて、各々が楽しんでいた。当日は子どもたちが20人ほどいたため、仲間はずれになる子がいないように気かけながら活動したが、皆楽しんでくれたように思う。最後には団員に向けてHOCの皆で竹内まりやさんの「いのちの歌」を歌ってくれた。子どもたちのまっすぐな気持ちに触れたことで涙する団員もいた。帰り道に手を繋ぎ、バスに乗る最後の最後まで私たちを囲んで見送ってくれる子どもたちの姿がとても印象に残っている。「児童養護施設には恵まれない可哀想な子どもたちがいる」と勝手に思い込んでいたが、HOCを訪問したことでその考えが大きく変化した。ここにいる子どもたちは“恵まれないから支援の対象”という存在ではなかったし、子どもたち自ら心を開き、初対面の私たちに優しさを恵んでくれた。昨年の団員との思い出を嬉しそうに話すのも印象的だった。「HOCを卒業したあとは日本に留学したい」と目標を持って日本語の勉強をしている少女もいた。その姿は私たちと何も変わらない、夢を持つ一人の青少年だった。

私たちにできることは哀れむことではなく、ここにいる子どもたちが興味を持ち、やりたいことができる環境を一緒に作り上げていくことではないだろうか。支援の方法は物資提供や寄付など多岐に渡るが、「何かを与える」支援だけでなく、彼らの夢を共感し、後押しできる存在になること、つまり「応援団」になることも必要ではないだろうか。現地に赴くこと以外でも力になれることはたくさんある。今回の訪問のみで終わらず、今後も関わりを持つことで子どもたちの心の拠り所になりたいと強く思った。

(写真:宮本 結衣・榎本 真子)



すぐに打ち解けた子どもたち



皆で記念写真



子どもたちからのヘアアレンジ



料理も皆で協力!

## カンボジアの教育を上げる学生との交流

バタンバン教員養成大学(BTEC) 11月11日(月)

研修5日目、バタンバン教員養成大学(BTEC)での文化交流のため、大学を訪問した。大学に到着すると、学生たちが伝統的な仮面や衣装を纏い、太鼓などの楽器を鳴らし盛大に出迎えてくれた。大学の代表からカンボジアの教育の現状と大学の説明を受けた後、団員一人一人に記念品が手渡された。今日というこの日を私たちだけではなく、大学側も楽しみにしてくれていたことに嬉しさを感じた。

過去の内戦による教員不足や教育の質の低下を背景に、BTECでは国内やASEAN地域で活躍する小・中学校教員の養成が行われている。都市と地方の教育格差を縮めるため、国内外の団体とも協力し、教育・学習インフラの整備を進めている。JICAや大学を中心に日本との交流も盛んに行っている。大学の代表挨拶では、訪問への感謝と福岡県との友好的な関係継続を望む言葉が心に残った。

その後、学生が日頃ダンスの練習などを行う部屋を見学した。今回グローバル青年の翼実行委員会からスマートテレビを寄贈しており、映像を見ながらダンスの練習ができるため大変役に立っていると喜ばれていた。学生たちによるカンボジアの伝統舞踊であるアプサラダンスの披露が行われ、独特の衣装を纏い、息のあった滑らかな動きはとても印象的だった。披露の後は、学生たちにアプサラダンスを習ったが、実際に踊ってみると、足の動きなど、見るだけでは気づけなかった細かい動きの重要性やその複雑な動

きにアプサラダンスの奥深さを感じた。

私たちは学生との交流のため、文化祭とミニ運動会を開催した。文化祭では、日本の高校の制服紹介や折り紙と習字の体験を用意。特に習字では、学生たちにとって慣れない「漢字」に悪戦苦闘しながらも、何とか形にすることができ、達成感を味わっていた様子だった。その後は、運動会へ。まずはラジオ体操からスタート、団員と学生が混じり、赤組と白組に分かれて競技を行った。競技内容は紙飛行機早折リリレー、お玉リレー、二人三脚の3種目で、二人三脚では、団員と学生二人一組で競う。「ムオイ、ピー、バイ(一、二、三)」とクメール語で掛け声をかけ、タイミングを合わせながら競技を行うことができた。最後は地元福岡、広川町の伝統的な踊りである広川音頭を披露し、学生たちも含め全員で踊り、ミニ運動会を終えた。

その後、昼食は前日訪れたCAFE HOCのお弁当を学生と一緒に食べながら、お互いに日々の生活の何気ない話や将来の目標について語り、より一層仲を深めることができた。

BTECにおける研修では、人々は国や言語の壁を超えて交歓できることに気がついた。また、学生たちの能力の高さと将来に対しての意識の高さを感じ、私たちも負けられないようにこれからも努力していきたいと思った。

(文責:中瀬 雄大・山本 夏鈴)



アプサラダンスを練習する様子



息を合わせて二人三脚



習字に取り組む



広川音頭を皆で踊る様子



グローバル青年の翼実行委員会からスマートテレビの贈呈



学生と団員の集合写真

## ナイトマーケットで深く生活に触れる

ナイトマーケット 11月11日(月)

カンボジア最後の夜には、シムリアップのナイトマーケットを訪れた。ホテルから大体4人ずつトゥクトゥクに乗り合わせ、10分ほどで到着した。初めてトゥクトゥクに乗る団員も多く、その新鮮さに興奮していた。皆風を気持ちよく感じたり信号で他の団員のトゥクトゥクと隣り合わせになったりしながら移動も楽しんだ。

マーケットに到着して、ガイドの方に簡単に道を案内してもらった後、それぞれで自由に散策することになった。道路沿いにはトゥクトゥクがびっしりと停まっていて、前を通り過ぎる度に運転手に日本語で話しかけられた。初めは「ノル?」と聞かれ、「乗らない!」と答え、「ナンダヤネン!」という返事が返ってきた。欧米人の観光客も見かけたが、日本人の観光客が多いため、マーケットでも日本語が分かる現地の人が多かった。マーケットは道路沿いに露店がずらりと並ぶほか、間の小道から進むと内側にもさらにたくさんの店が構えていた。多くの人が行き交い、とても賑やかな雰囲気だった。

店員に「コンニチハ」などと話しかけられながら露店を見て回った。面白いと思ったのは、この市場に置いてある商品には値札が付

いていないことだ。ここでの買い物は、値段を聞くところから始まるのだ。欲しいものを見つけたら、まず店員に「いくらか?」と尋ねる。店員は初め多少高めめの値段を提示してくるため、こちら側は値引きの交渉を始める。この交渉は私たち観光客と、現地の人々(店員)との一種のコミュニケーションのように感じた。このコミュニケーションを含めて客はよりいっそう買い物を楽しむことができる。実際に私たち団員もプレスレットや現地の通気性の良い服、置き物など様々な買い物をしたが、いずれの場合も店員とのたくさんのやり取りを通じて購入することができたと思う。

店員はとてもフレンドリーな方が多く、値引き交渉中もお互い笑顔で楽しくやり取りをすることができた。そして、これらの会話を通じてカンボジアの方の人となりを感じることもできた。

また、カンボジアの現地通貨であるリエルは両替ができなため、うまく使う必要があったのだが、このマーケットで多くの団員がリエルを使い切ることができた。

このマーケット視察は、現地の人々と想像以上に密接に交流することができたとても貴重な機会となった。

(文責:安部 エリカ・釜本 一花)



道端にたくさんのトゥクトゥクが!



店員と楽しく会話



トゥクトゥクに乗ってナイトマーケットへ



華やかな通り パブストリート

# 東南アジアのビジネスハブ・シンガポールへ

移動(シエムリアップ→シンガポール) & JETROシンガポール 11月12日(火)

## シエムリアップからシンガポールへ

海外研修6日目は、朝早くにホテルをチェックアウトし、シエムリアップ空港へ出発した。カンボジア滞在中ずっとお世話になっていた現地ガイドのパークン氏とは、この空港でお別れだった。団員からのお礼として、各自が持参した日本のお菓子を持ち寄り、プレゼントした。飛行機に乗り込むと、機内ではどの団員も眠りについていた。

約2時間のフライトを経て、シンガポールのチャンギ空港に到着した。自動化されたスムーズな入国審査の後、ココナッツの香りがするバスで次の目的地The Company Singaporeへ移動した。予定より早く到着したため30分程の自由時間が設けられると、多くの団員は近くにあったホーカーセンターへ赴いた。ホーカーセンターとは屋台がフードコートのように集まった場所で、日本ともカンボジアとも異なる屋台文化があった。一帯は清潔感があり、屋台でクレジットカードが使用できることにも驚かされた。

## JETROシンガポール

JETROシンガポールの本田氏からは、ビジネス拠点としてのシンガポールの概況と日系企業の進出動向についてご講演いただいた

た。JETRO(日本貿易振興機構)とは、貿易や投資の促進と海外調査研究を通じ、日本の経済・社会の発展に貢献することを目指す独立行政法人である。主な業務内容は、日系企業がシンガポールでビジネスを行う際のお手伝いやシンガポールのビジネス動向を調査することであるというお話を聞いて、事前研修で学んだJICAや日本財団とは異なり、研究成果を海外現地ではなく日本に還元することを目的に活動されているという点が特徴的であると感じた。

団員から、講演の中で紹介されたスマート国家構想を進める中でシンガポールの高齢者はどのような状況なのかという質問が出た。「シンガポールでも日本と同様に、技術革新に高齢者が取り残される現象が起こる。シンガポール政府は、新技術を段階的に導入したり、高齢者は別口で対応したりという配慮を行っている。最初から完全導入を目指すのではなく、7・8割の導入で成功とみなす傾向がある」という言葉が印象的だった。

また、シンガポールはマーケット市場ではなくあくまでハブであるというお話も記憶に残っている。アジアのハブとしてシンガポールがどう発展し、また今後ここに日本人がどう関わることができるとについて、シンガポール最初の訪問地で国際協力とビジネスをミックスさせた視点を得ることができ、その後の視察における指針にもなった。

(文責:石橋 紀歩・井尻 秀徳)



カンボジアとガイドに「オーブン！」



シンガポールのビルの多さ・高さに驚き



清潔な多国籍屋台エリア:ホーカーセンター



本田氏と熱心に質疑を交わす団員

# シンガポール県人会との夕食交流会

IPPUDO 11月12日(火)

JETROシンガポール視察後、シンガポールに在住する福岡県出身者の集まりである福岡県人会との交流会を実施した。この夕食交流会は、福岡県で創業し、現在15カ国にお店を展開する「IPPUDO」で行われた。福岡の一風堂で食べる味と変わらず、おいしいラーメンを食べることができた。シンガポールでも、このような福岡の味を食べることができることに、日本食の広がりを感じ、感動した。

日本企業のシンガポール駐在の方など、シンガポールで様々な仕事に携わる方にご出席いただき、シンガポールでの業務内容、海外で仕事をされることになった経緯などの貴重なお話を聞くことができた。

夕食交流会のたくさんのお話の中で印象が残ったのは「会社では年齢に関係無く、能力が有る者が出世できる」ということである。日本の会社では年功序列を常に意識している。

確かに日本で働いていれば、日本の社風やルールなどに従わないといけない。どれだけ才能や能力が有っても、入社したばかりで、急に管理職になる事はほとんどないだろう。そう考えてしまうと、挑戦する気持ちを失って、元々持っている才能は埋もれ、成長

できない一面かもしれない。この話は、直前にJETROに伺った話とも連動してくる。

ところが現在はグローバルの時代であり、外国的な多くの日本企業が少しずつ変わっていく中で、優秀な人材は当然厚遇されているし、ここシンガポールの新卒などは優秀な人ばかりとも聞く。問題は、年齢を重ね会社の体制や待遇が変わるのを待つのか、自分の可能性を広げるために、今すぐに学ぶのか。福岡県人会のお陰で、会社と福岡県に対しての、自分の存在、立ち位置を改めて考えさせられた。もっと積極的に知識とスキルアップしながら、学んだ事を地域と社会に貢献したいと一層気持ちを強くさせてくれた。

シンガポールの物価事情や家賃の話などから、自分のキャリアと家庭の両立についてなど、様々なお話を聞くことができた。子育てをしつつも、自分のやりたい仕事をあきらめずに挑戦される方のお話も聞くことができた。自分が将来、そのような壁にぶつかり、悩んだ際に思い出したいと思う。海外で働くからこそ経験できることや、その良さを知り、将来の選択肢が広がった。お忙しい中、お集まりいただいた県人会のみなさんに感謝したい。

(文責: NGUYEN THI DIEM THUY・丹下 紗希)



福岡発のラーメン店、一風堂にて



福岡県人会



閉会後も話は尽きない



貴重な情報交換の場となった

## シンガポール市内の施設や名所を視察

シンガポール市内 11月13日(水)

シンガポール最終日の午前は、公共交通機関を使って移動しながら、シンガポール市内を視察した。ICカードをかざして2階建てのバスに乗り込んだ。バスの2階では、前方にある大きな窓からシンガポールの綺麗な街並みを眺めることができた。高いビルが建ち並びながらも緑があり、植物と共存しているシンガポールの街並みは、私たちを魅了した。

まず向かった先は、観光名所マライオンがあるマリーナベイエリアだ。マライオンの周辺にはお土産を売っているお店があり、多くの観光客で賑わっていた。お店に入ると日本語で接客され、日本人観光客が多く訪れていることを実感した。

次に、自然と人工物が融合した植物園施設である、ガーデンズ・バイ・ザ・ベイを訪問した。特徴的な形をした人口の木「スーパーツリー」は、唯一無二のデザイン性と圧倒的な高さで存在感を放っていた。犬の散歩をする人々もいて、現地の人々にも愛されている施設であることを知った。

移動には、地下鉄も利用した。複数の路線が入り込み、5分待てば次の地下鉄に乗れるという充実した交通網であった。駅周辺では、大規模な地下鉄の延伸工事が行われており、発展し続けているシンガポールを目の当たりにした。

車両は日本で乗る地下鉄よりも幅があり、ゆったりと乗ることができた。地下鉄の車両内には、「[NO EATING OR DRINKING FINE \$500]という注意書きがあった。座席に座って水を一口飲もうと思った瞬間にその注意書きが目に入り、急いでペットボトルをカバンにしまった。シンガポールが「Fine City」と呼ばれることを実感した瞬間だった。そのような罰則のおかげか、綺麗で清潔な印象を受ける街並みでもあった。

更には、街中ではさまざまな人種が共存していることを実感した。道を歩いていると、さまざまな民族の人々が行き交い、街並みにそれぞれの文化が色濃く反映されていた。中国系、インド系など多人数の人々が一緒に生活している様子は、シンガポールの多文化共生社会の象徴であり、日本ではあまり見ることができない光景だった。

シンガポールは洗練された都市でありながら、自然との調和や多様性を大切にしていることが感じられた。街並み、公共交通機関、人々の多様に触れることで、シンガポールという都市がどのように発展し、成長してきたのかを垣間見ることができ、非常に有意義な視察となった。

(文責:末吉 鼓太郎・宮本 美咲)



観光客で賑わうマライオン周辺



リトル・インディア(インド人街)



シンガポールの夜景



二階建てバスに乗り、景色を眺める団員

# フードバンクでのボランティア、そして出国の時

The Food Bank Singapore / 空港へ 11月13日(水)・14日(木)

シンガポールの市内視察後の昼食を終え、フードバンクのボランティア活動に参加した。

移動開始からスコールにあい、晴天続きで油断し、傘を持ち歩いていない団員もいてしばらく足止めされたが、なんとか雨に濡れずに済む道を探し出し、目的の活動場所である公団住宅へと到着した。午前中に視察した高層ビルが立ち並ぶエリアと比べて建物の素朴さに衝撃を受けた。緑豊かな街並みは変わらないが、煌びやかな存在がないように見えた。

フードバンクとは、食品企業の製造工程で発生する規格外品などを引き取り、福祉施設等へ無料で提供する団体・活動だ。福岡でもフードバンクをテーマにしたNPO法人が存在しており、個人でもスーパー等で気軽に食料を寄付できる取り組みが近年広がってきている。

2012年に設立されたフードバンク・シンガポール(FBSG)は、シンガポール初のフードバンクであり、すべての食品寄付を収集し、シンガポールの低所得者や恵まれない個人および家族に再分配することを目的としている。「Joy In Every Bundle」活動では、箱単位で届く食料をトラックから下ろして開梱した後に、取り出した食料を配達専用のバッグに1種類ずつ詰め込む作業から開始する。これら食料は企業から受けた資金提供を元にフードバンク側で集めている。こういった支援をしていることも企業の評価に

繋がるため企業は積極的に行動するという。20個以上のセットを詰め終え、渡されたリストを元に配達を始める。持てる分だけの配達バッグを持ち、配達先のインターホンを押して回った。

今回訪問した中では、住人に中国系の方が多い印象だった。シニア層がメインになる賃貸住宅で、日本の公団住宅のように、収入の額によって賃料が変わったり無料になったりすることは無いという。シニア層故なのか、シンガポールの公用語である英語で配達に来たことを告げても「英語は分からない」と言われてしまうことがあった。配達ボランティアについてFBSGから各世帯に予め連絡をされていたこともあり、初対面になる私たちでもフードバンクの配達バッグを見せれば扉を開けてくれた。

フードバンクで一仕事終わった後は、海外研修最後となる夕食会場Red House Seafoodに向かい、シンガポール名物チリクラブなどの海鮮料理を楽しんだ。夕食後は迫り来るフライト時間を気にしつつ、各自オーチャードロードでお土産を買ったりマリーナベイサンズの展望台に登ったりと、シンガポールの街を堪能した。いよいよ空港へ向かい帰国の時。飛行機は深夜便のため、団員には疲れが見えつつも、久しぶりの日本に帰国を楽しみにしている者や名残惜しい者など、様々な想いを胸に飛行機へ乗り込んだ。飛行機の中では爆睡であった。団員1名の荷物が届かないというハプニングがありつつも無事全員が帰路に着くことができた。

(文責:渡邊 裕加・青木 里花)



物資を受け取る団員たち



チリクラブに大興奮



マリーナベイサンズ展望台



フードバンク責任者との質疑応答

**FoodBANK**  
THE FOOD BANK SINGAPORE LTD  
新加坡食物銀行  
FOODBANKロゴ

# これまでの研修をまとめ、成果発表へ



於：オイスカ西日本研修センター 12月7日(土)～12月8日(日)

## 1日目

一泊二日の第五次研修は、第一次研修と同様にオイスカ西日本研修センターで行われた。海外研修以来の団員同士の再会に、私たちは自然と笑顔になっていた。研修1日目には、国連本部で政務官として働いていた川端清隆氏より「福岡から世界に 国際社会で働くということ」をテーマにご講義いただいた。国連の使命や国際機関で働くための道のり、国際的な現場で活躍するために今私たちがすべきことなどを、経験談を交えながらご教示いただいた。国連の日本人職員数が少ない原因として、日本人にとって国連が政策実行の場であるという意識が低いという指摘に、はっとさせられた。「国連の役割を正しく理解し、平和のために国際的な負担を負う必要がある」という言葉には、国連職員だった川端氏だからこそその重みがあった。

1日目の夜には、オイスカ研修生との交流会を実施した。私たちからは、端的に海外研修で取り組んだことや学んだことの発表をし、その後、オイスカ研修生からのアジアの国々の踊りや音楽の披露を受けた。楽しそうな踊りに釣られ、途中からは私たちも加わっ

て皆で踊った。音楽にはパイプを使った楽器が使われており、初めて見た団員一同は興味津々だった。踊りや音楽は国や言語の壁を超えて仲を深めることができるツールだと感じた時間だった。

## 2日目

研修2日目には、これまでの研修の成果をテーマ別(観光・食、人材育成・教育)の班に分かれて発表した。これまでの研修を踏まえて見つけた課題や気づき、そしてこれからの福岡への提案を発表した。発表後には、アドバイザーから講評をいただいた。研修を通じてずっと、団員の近くでサポートに徹していただいたアドバイザーからの講評は、この成果発表に至る過程をよく捉えており、とてもありがたかった。発表のあとは修了式として、団長から団員に修了証書が渡された。代表の団員は、今後の福岡でグローバル人材として活躍する意気込みを語っていた。修了式後、団員はやりきったという自信や達成感と共に、研修が終わる寂しさを感じていた。この3ヶ月間は短いようで、私たちにとって仲間と過ごしたかけがえのない時間だったことを感じさせられた。

(文責：山本 健志・宮本 美咲)

## 研修内容

・「福岡から世界に 国際社会で働くということ」……………川 端 清 隆 氏 元国連本部政務官・元福岡女学院大学特命教授



楽器を叩いてみる団員



成果発表する団員



修了式の様子



修了証書を持って、記念撮影

# 福岡県副知事に対し、 プログラムとして最後のアウトプット

於：福岡県庁舎 8階 12月18日(水)

すっかり冷え込んだ12月中旬、福岡県庁にて生嶋副知事への表敬訪問を行った。団員は18人中16人が出席し、副知事に対してこれまでの研修成果を直接報告させていただいた。

まずは団員それぞれから研修で学んだこと、そしてそれをどう生かしていきたいかについて話した。簡潔ではあったが十人十色の内容で、団員としても改めて研修を振り返ることができた。

次に研修内容とその成果を、「人材育成・教育」と「観光・食」の各班のリーダーが代表して報告した。ここでは海外研修での学びを中心に、想定していたイメージとの違いや福岡や日本、世界のために今後できることを発表した。副知事はそれを頷きながら聞いてくださり、現地に赴くことの意義について言及した際には特に深く頷いていた様子だった。発表後副知事からは現地へ足を運び体験することの大切さについて、副知事ご自身が過去アメリカに赴かれた経験を踏まえたコメントをいただいた。

最後には副知事と団員間での懇談の時間が設けられ、カンボジ

ア・シンガポールに行き驚いたことなどを話した。中でも、この研修が初めての海外渡航となったある団員が話した内容が印象的であった。彼は「途上国」と「先進国」という枠組みに由来する印象から渡航前には一種の偏見めいたものをそれぞれに持っていたが、カンボジアではほとんど不自由なく生活を送れたことやシンガポールにも貧富の差や言語運用能力の差があったことなど、事前イメージとは異なる現状を目の当たりにし現地の表と裏の面を知れたと述べ、世界を相手にした仕事への関心が高まったようだった。

この副知事表敬をもってプログラムとして団員が集まる機会は最後となった。長期に渡る研修をやり遂げた団員たちは、それぞれ得た学びを通じてどういう未来を創造したいか見据え、歩み始めていた。そしてその表情は、東南アジアの強い光を浴びたからか、一層輝いて見えた。

(文責：伊尻 秀徳)



発表する団員①



発表する団員②



副知事との記念撮影



# 団員レポート 2024

## 教育に関わる者として

青木 里花

学校法人福岡女学院



私がこのプログラムに参加した理由は、研修内容に【教育】【海外】に関することが含まれていたからだ。その理由として私自身が大学で勤務していることと学生時代から海外との交流活動に興味があったこと、海外の教育制度についても知りたいと思ったからである。

海外研修で最も印象に残っている視察先はバタンバン教員養成大学である。交流した現地の学生とお話をするなかで、皆さんが「先生になりたい」という強い志をもっており、毎日多くの時間勉強に励んでいることを知り心打たれた。私は普段福岡の大学で働いており大学生と関わる機会が多くあるが、どこの国にも目標をもって物事に打ち込む学生がいることに嬉しい気持ちとなった。また交流した学生の方々は英語が分かりやすく流暢であったが、どのように英語を勉強したか尋ねると、実は英語で海外の人とコミュニケーションを取るのとは初めてということだった。大学の授業でお互いに英語を話すことはあるだろうが、彼らにとって、私たちのような海外の人と話すのが初めてでも、こんなにレベルの高い英語力を持っているのかと驚かされた。

ポル・ポト政権以降、カンボジアでは教育の質の低下が起きているとのことだが、交流を通して、カンボジアの国全体で教員の質を取り戻そうとする取り組みの成果を感じることができた。

また研修全体を通してカンボジアの教育について知っていくなかで、日本の教育の質の高さに気付かされた。例えば義務教育で当たり

前に教えられていた公衆衛生に関する【帰宅時の手洗いうがいの習慣】や【食事の大切さ】などは、カンボジアの現在の教育現場では科目として教えられておらず定着していないとのことだった。他国と比較することで、学校で国語や数学などの基礎科目以外を学ぶことの重要性を知ることができた。

国内研修では日本財団で海外への支援を行っていた野見山先生、国際連合で25年の経験がある川端先生の講演などを聞いた。私自身のキャリアを考える上でも様々な選択肢があることを知ると同時に、紛争が起こった地域に対する民間企業と財団・公的団体との支援の形の違いや、海外で働く上で必要とされる素質など、現在私が仕事で関わっている将来海外で活躍したいと考えている高校生・大学生に伝えたい内容ばかりで大変勉強になった。仕事をする中で高校の先生方と関わり、日本の教育政策などを見ていると、キャリア教育など政府から高校に指導を任されている分野に関しては取り組み具合に差が生まれており、進路選択の面からもどかしさを感じることもある。私1人の力では教育現場を改善することは難しいが、一大学の職員としてできること、そして社会全体に貢献できることをこれからも模索していきたいと思う。

## 発展するアジアから日本・福岡を見て

山本 夏鈴

福岡女子大学



大学での留学生との交流が青年の翼事業への参加のきっかけである。大学では留学生から日本や福岡について質問をされ、教える立場になることが多い。そのため、アジア諸国から地域や自身の成長に繋がる気づきを得ようと学ぶ立場で海外に赴く本事業に新鮮さを感じた。また、訪問国は急速な発展を遂げるカンボジアとシンガポールである。国内で見聞してきたアジアの発展を自分の目で確認することに惹かれ、参加を志望した。そして研修では、アジアにおける日本や福岡の存在を客観的に捉えたいと考えていた。観光、仕事、留学先として、福岡を含め日本が選ばれる中で海外からの日本や福岡の見え方に興味があったからだ。

研修では人・物・技術を通じた日本や福岡の世界との関わりを感じた。カンボジアでは政府の支援の他に、大学による遺跡の修復、福岡の自治体による水道の品質向上、福岡の観光車の観光資源としての再活用があることを知った。シンガポールでは日本食の人気、日本・福岡の企業進出から日本や福岡の存在を感じる場面が多かった。このように日本や福岡の存在はあるが、中国からカンボジアへの支援が拡大していたり、欧米人が観光客の大半を占めていたり、他国の影響の強まりを感じたことも事実である。

もう一つ印象に残るものとして、環境を理由とせず学びに向かうカンボジアの人々の姿がある。カンボジアで出会ったガイドの方は、7人兄弟の内学校に通えたのが自分だけであり、家族を支えるために

英語と日本語を習得してガイドになったと話していた。また訪問した地雷博物館の運営者の方は、内戦により学校に通えなかったが、成人後に独学で日本語を習得し、現在では日本語による説明を自ら行っていた。このエピソードとアジアでも英語が当然に求められる現実を知った時、世界と繋がるツール・英語を不自由なく学べるにも関わらず、スキルとして身につけられていない自分が世界から取り残されている感覚を覚えた。

研修を通じて日本や福岡と世界の関わりが見えたと同時に、世界と繋がるチャンスを活かさきれていない自分に気が付いた。一方、アジアには世界の流れに対応し、自国を世界に発信しようとする熱意を持つ人々がいた。各国が成長し、他国との関係を強化する中で、こうした個人の力が国や地域の発展に繋がるのだと感じる。国や地域、世界へと広く関心を持ち、変化に気付き、常に今の自分にできることを考え行動していきたい。

Global Wings

2024

Group

1

## 「多様な価値観」「広い視野」

榎本 真子

福岡大学



世の中には様々な研修プログラムがある中で私がグローバル青年の翼に参加した理由は、海外研修の前後に国内研修があるからだ。海外研修のみの研修プログラムはよく見かけるが、国内研修での事前学習や事後考察があることでより深い学びを得ることができる点に魅力を感じた。

そして実際にグローバル青年の翼に参加したことで多くの学びを得ることができた。

まず、「多様性」「広い価値観」という言葉は聞こえが良いしぜひ身につけたい力ではあるが、これらがいかに難しいかを学んだ。政治(資本主義・社会主義)や宗教が異なる場合、常識や考え方、社会習慣等が大きく異なることがある。これらが異なる人々で一つのチームになって活動する場合・同じ空間で生活する場合は、多様性を受け入れる力や広い価値観をもつことが重要になるが、これが非常に難しい。多様性を認めるということとは、単純に肌の色の違いや衣服の違いなどの表面的なものを受け入れることだけではないからだ。第5次研修時に講演いただいた元国際連合政治局政務官の川端氏のお話の中で、「イスラム圏では40代男性と10代前半の女の子が結婚する事例が一般的にあるが、これはやめさせるべきなのか、社会習慣として認められるのか」というものがあり、考えさせられた。同様に、職場や学校でヒジャブの着用を認めるか、日本のような法律で土葬が禁止されている国は、宗教的に土葬で埋葬したい人々に対してどのように折り合いをつけるべきか、国内に自国ではメジャーではない宗教建造

物が多く建つことに対しての近隣住民の賛否など、根深い課題が多くある。一方で「これらの問題について正しく理解

する必要はあるが、全てを受け入れる必要はない」という講師の方の言葉が印象に残った。まずは理解。その上でどこまで受け入れるのかは受け入れる側に委ねられるとのことだ。私もこの考え方には賛成だが、いいとこどりは良くないと思う。受け入れる側にとって都合の良いこと(ファッション・食事・音楽など)のみを受け入れて、不都合な内容や違和感を感じることを受け入れずに排除していると、本当に相手を歓迎した受け入れにはならないと考えるからだ。

また、国内研修で日本・カンボジア・シンガポールの「食」と「人材」に関する現状・課題・特徴などについて各々自主研究したほか、著名な方々から貴重な講演をさせていただきアジアを中心に多くのことを学んだため、第4次研修で海外にいった際により多くの学びと気づきを得ることができた。加えて志の高い仲間とともに国内・海外研修に行くことで多くの刺激を得ることができた。

私は今回の研修に参加したことで多少は視野が広がり多様な価値観を知ることができた(完全に身につけるにはまだまだ時間がかかる)。このような固定概念にとらわれない柔軟な思考力は国際関係の仕事にとどまらず、日常のさまざまな場面で役に立てられると考えているため、グローバルな人材になれるよう今後も精進したい。

Global Wings

2024

Group

1

## まだ知らない新しい世界

釜本 一花

福岡女学院大学



私がこの研修に参加しようと思ったきっかけは、母からの薦めによるものです。私は、東南アジアに対してあまり良い印象を持っていませんでした。治安や人柄は悪く、コミュニケーションをとることも難しいような地域なのではないかと思っていました。それは、今まで教科書に書いてあることを当たり前のように聞いてきた授業での内容が原因なのではないかと思い、自ら東南アジアに赴き、教科書とは異なった視点からみてみたいと考え、参加することを決めました。

結論から言うと、この研修に団員として選ばれ参加できたことを非常に嬉しく思っています。東南アジアの悪いイメージが払拭され、たくさんの気づきを得ることができたからです。

実際に訪れた観光地のアンコール遺跡群は綺麗に保護されており、どの遺跡も立派な顔立ちで迫力がありました。また、道路は車が通れるくらいにきちんと整備されていました。

そして、私が一番感銘を受けたのが、語学の能力、コミュニケーション能力が高いということです。バタンパンの教員養成大学に訪問したのですが、学生と会話をしている、彼らは英語が堪能で、恥ずかしながらも私はあまり会話を繰り広げることができませんでした。やはり、英語は世界の共通語で、一番使われる語学です。それなのに私は、英語力が微塵もなく、英語に対する意識も低いのだなと実感しました。また、レストランやマーケットの方々、HOCの子どもたちとも、英語はもちろん日本語も使ってたくさんコミュニケーションを取りま

した。商売のため、将来働くために努力をしているのだと教わりました。

この研修を通じて、やはり私は視野が狭かった、目の前のことだけしか見ていなかったのだなと気づきました。こんなにも語学の能力が高く、将来のために必死になって、商売をするためにたくさんの言葉を覚えている人々がいるという現状があるということは、現地に行かなければ気づくことはありませんでした。治安や人柄が悪いと、この研修中で一度も思いませんでした。気さくな方々が多く、逆に私が元気づけられることのほうが多かったです。半年前までの私はこのように思えたでしょうか。私の価値観は180度変わりました。現代は学校の授業やインターネットの普及により数多くの情報が私たちのもとに入ってきます。しかし、一つの固定概念にとらわれず、自らの目で、耳で、肌で感じるほうが一層ワクワクするということや、多様な価値観を得ることができる楽しさに気づきました。これは、私の人生の中で大きな分岐点となりました。今回の研修をきっかけに、これからまだ知らない世界の現状に目を向けていきたいです。

## 交流を通して考える「教育の本質」

宮本 結衣

株式会社福岡銀行



私は海外の「教育」に対する捉え方を理解する目的で本研修に応募しました。応募当初、私は銀行の営業店に勤めており、福岡の方々が豊かな生活を送るための金融に関する情報提供に励んでいました。金融知識の提供には若年層向けの金融教育も含まれ、今後そのような業務にも関わっていきたい私は、「教育」という観点から海外に興味を沸かしました。経済の発展が目覚ましく成長を遂げているシンガポールと、過去の内戦により教員不足と言われるカンボジアが「教育」をどのように捉えているのか学びたいと思い研修に参加しました。

実際に国内・海外研修を経て、上記の考えが大きく変わりました。シンガポールは教育にける国家予算が高く、ICT教育も日本に比べ積極的ですが、教育費の負担が大きく、出生率は0.97と、東京都と同程度の低さでした。教育が家庭環境に関わらず平等に受けられる教育制度ではなく、シンガポールの優秀な人材育成は富裕層のもとで成り立っているのだと知りました。

一方カンボジアでは、教員養成大学(BTEC)の学生との交流会の中で英語が堪能な学生が多く、英語教科としてだけでなく実践的な英語を習得している点が印象に残りました。HOCIにいた18歳の少女も、日本に留学することを目指して日本語を熱心に勉強していました。もちろんカンボジア地域内での教育の格差はまだ根深くありますが、都心での教育への環境整備はシンガポールや日本と大きく差はなく、勉強への熱意は地域関係なく日本の学生よりもはるかに溢れ

ているのではないかと感じるほどでした。

実際の教育現場を見聞きして、「教育」はその国の現状や求める人物像によって捉え方は多様ですが、「教育を受ける環境の整備」と「教育を受ける本人の向き合い方」は共通して重要ではないかと感じました。誰もが一定のレベルの教育を平等に受けるには国・地方公共団体の制度や本人の置かれている環境が大きく影響しますし、本人の熱意なく優秀な人材育成は出来ないと考えます。それは銀行も同じで、多様なバックグラウンドをもつ幅広い年齢層のお客様が等しく理解ができる金融知識の提供が求められ、お客様ご自身が納得でき、さらに興味を持ってもらえる情報提供が必要だと気付きました。

また、現地の方だけでなく国内研修でご講義いただいた講師の皆様や、共に過ごした団員から聞く話も新しい価値観に触れることができ、貴重な知見となりました。今まで学んできたことも、仕事内容も異なる団員と過ごした3ヶ月は本研修だからこそ得られた貴重な時間でした。これからは銀行という枠に捉われず、幅広い視点を持ち考え方を常にアップデートすることで、これからの職業人生を通してお客様が真に求める金融知識の提供を目指したいと思います。

## 目標に近づくための第一歩

中嶋 陽貴

福岡大学



私が本事業に参加した理由は、福岡県内の史跡観光地化の更なる可能性を探るためです。大学で歴史学を専攻する中、福岡県内には歴史的に重要な位置づけにありながらも認知度が低く、観光資源としての魅力を十分に活かしきれていない史跡が数多く存在するのではと課題感を持っていました。本事業では訪問先に史跡観光地化の成功事例とも言えるアンコール遺跡群が含まれており、福岡県内の史跡観光地化の可能性を探る上で判断材料になると考え、参加を希望しました。

実際にカンボジア、シンガポールを訪問したことで多くの気づきと学びを得ることができました。例えば史跡保護に関する国際協力です。カンボジアでは内戦の影響や自然劣化により、アンコール遺跡群の多くが損傷していました。そのためユネスコ世界遺産に登録後、諸外国によって保護活動が行われました。アンコール遺跡群の一つであるタ・プローム寺院を訪れた際、樹木が絡む建造物の保護をインド政府が支援したとする記載が国旗と共に掲載されていました。タ・プローム寺院以外の場所でも同様の記載は見られ、カンボジアでは国際協力プレートと呼ばれていて、現在のアンコール遺跡群の荘厳な姿は国際協力によって編み出されたものであると実感しました。

また現在、福岡県に限らず日本全国で史跡の維持管理を巡って、支援不足に苦しむ自治体が多い中、こうした国際協力の要請を検討することで持続可能な保全を模索できるのではないかと感じました。

カンボジア、シンガポールを訪問してもう一つ、興味を持ったのは観光地で必要となる入場料についてです。カンボジアのアンコール遺跡群、シンガポールのマリーナベイサンズといった主要な観光地では地元住民と観光客との間で入場料に差異が見られました。この差異によって観光客からより多くの資金を得る事ができ、観光地の保全や設備への更なる投資を可能にしていると感じました。観光地における料金の差別化は、福岡の観光戦略に応用できるのではないかと考えています。

今回、グローバル青年の翼に参加したことで、私の目標である福岡県内の史跡観光地化をより推進するための施策を具体的に検討する事ができました。また、今回の研修で出会った団員の方々との交流は、私にとって非常に刺激的なものでした。一人一人が目標を持ち、多種多様な視点から意見を交わし、互いをリスペクトしながら向き合う、このような方々に囲まれて過ごした半年間は私の大学生活における大きな財産となりました。この事業に参加したことで、自身の目標へと近づくためには行動力が必要であると、より一層、実感しています。これからも目標へアプローチするためには、どのような行動を起こすべきか、或いは求められているのかを、絶えず模索していきたいと考えています。

Global Wings

2024

Group

1

## 唯一無二の財産たち

伊尻 秀徳

九州大学



私がこのプログラムに応募した理由は大きく2つあります。1つは、普通の海外旅行では味わえない「海外研修」の魅力を感じるため、もう1つは、学生と社会人との間でものの考え方等にどんな違いがあるか体感するためです。私は現在大学4年で、来春からは旅行会社に勤める予定です。社会人になる前に準備できることはあるだろうかと考えていた中でこのプログラムに出会い、参加を決めました。

そして今、この研修を振り返った時真っ先に思い浮かぶのは団員とHOCの子供たちの顔です。アンコールワットやマーライオンなどの観光スポット訪問も勿論楽しかったのですが、最も印象に残ったのは「人」でした。

HOCの子供たちに対し私は、経済状況や彼らの背景抜きに、純粋に彼らが可愛かったために、何らかの形で力になりたいと思いました。正直に申し上げると、カンボジア訪問前まで私は、1つの孤児院にのみ支援するのは不平等で、持続可能でもないから偽善的なのでは、とすら考えていました。しかしこれは誤りでした。一括りに「カンボジアの子供」と「日本人」という肩書きで見えてしまっていたが、実際は「人」と「人」との関わりでどう振る舞いたいのかという話だったのだと感じました。今後は現地ですべての人に会い話を聞き、関係を築いていくことを大切にしようと思います。

団員との繋がりはこのプログラムを通じて得た最大の財産です。社会人の団員が示してくれた地に足のついた現実的な考え方、大学

生が抱く将来への期待と不安、楽しむ時も議論する時もそれに真剣に向き合う姿、それぞれが刺激的で学びとなりました。

そして今回の経験から、旅行会社の人間として人との交流にスポットを当てたツアーを作り、より多くの人に新たな学びや出会いのきっかけを与えられるような人材になりたいという目標を立てました。団員やHOCの子供たち、BTECの学生や現地ガイドの方など、普通の海外旅行では出会えない人たちと今回出会い、非常に濃厚かつ充実した日々を過ごせました。この楽しさを多くの人に体感してもらえ、社会人として働きたいと思います。

Global Wings

2024

Group

1

## 柔軟に考える

渡邊 裕加

株式会社共栄ビル・パートナーズ



初め、研修のお話を上司から頂いたとき、挑戦しない気持ちでいました。会社の外で仕事をすることがあまりない事務として勤務しているため、海外の状況を学び、経験しても活用する場がないと考えていたからです。しかし、こういった挑戦はいつも言い訳をつけて避けている自覚があったため、「とりあえずやってみよう」と考えを改め参加しました。

今回の研修で特に印象に残ったのは、シンガポール県人会との交流会にて同業種のKMSの中村さんとお話した内容です。

外国人労働者が取得できるビザにはランクがあること、清掃や建設などの仕事は、「この職業につくのはこの国民」というランクに紐づいた認識が定着していると教えていただきました。確かに県人会後の市内視察で意識的に見てみると、同様の出身地と思われる方々が仕事をされていました。

また、シンガポール出身者を一定数雇用することで、雇用人数に応じた外国人労働者を数人雇用できるそうですが、これはシンガポール人の雇用を保護するための制度があることで単純な「人手不足」というよりも、外国人労働者を雇うための「シンガポール人不足」に陥っているそうです。そのため、出身者は今より高い収入が得られる仕事があれば躊躇無く転職を重ねるとのことでした。

日本と同じ少子高齢化が進むシンガポールですが、こういった偏見を生み出しかねない外国人労働者の受け入れ方を日本は参考にす

べきか、深く考えさせられました。偏見を産むことはその職種に就く労働人口を更に減らすことに繋がるとはありますが、まず自国民を優先するという考えにおいては、納得できる方法でもあるかもしれません。

さらに、海外進出についてお尋ねした際には、日本よりも物価の低い地域であるなら、日本国内で得られる利益と同等の成果を求めするために現地スタッフにはより多く働いてもらう必要があるという現実もご説明頂きました。カンボジアでは清掃サービスがまだまだ浸透していない印象があったため、1次研修で学んだ社会貢献と絡めてビジネスの糸口を作る方法で考えていた事でしたが、ご説明いただいた内容は私にとって盲点で、視野の狭さを痛感しました。安直だったと反省しつつ何が足りなかったのか、お話を伺いしながら考えることが出来ました。

今回の研修では、固定観念で物事を考えてしまっていることを自覚する良い機会となりました。SNS等の発達により他人の言葉から固定観念が定着してしまうことが増えています。まずは今回経験したことを周囲の人々に伝え、知って考え、実行することまで意識して増やして行きたいと思います。

Global Wings

2024

Group

1

## 研修を経て学んだ言語の役割

安部 エリカ

西南学院大学



私は現在まで英語を中心とした「言語」を勉強してきましたが、この研修で言語を学ぶ意義について改めて見つめ直すことができました。

私の周りには、法律関係の仕事に就きたいから法学部に入った友達や、教諭を目指して教職課程を履修する友達、看護師になりたいという強い意志を持って看護学校に通う友達など明確に自分のなりたい将来像を思い描き、それに直結する分野を学ぶ友達がたくさんいます。私はまだ将来の夢も決まっていないう、彼女たちに比べて、自分が学んでいる言語というのは何か特定の職に結びつくようなものではなく、とても抽象的であるため、それについて悩むことがありました。

しかし、この研修に参加したことでその悩みが解消され、より言語の勉強に力を入れようと思えるようになりました。

言語はあくまで手段であり、何かと組み合わせることで初めて意味をもつものであると考えていて、これまでそれ単体でしか言語を捉えてこなかった私に、この研修は組み合わせる「何か」の部分の例をたくさん教えてくれ、そしてそれは自分の将来を考える上での可能性を広げてくれました。

まず、私はこれまで言語と結びつく仕事を考えた際に、どうしても観光系や航空系等海外から日本に来る外国の方相手の仕事ばかりを思い浮かべていましたが、言語というのはそれだけでなく、あらゆる場面で何かと何かを繋ぐきっかけになり得るということを学びました。カンボジアでの農林水産省訪問の際や教員養成大学で交流をした際も、コミュニケーションをとるのは英語が中心で、そこで活躍す

る人々も英語を学ぶことで自分の国の可能性を広げようとしていたり、県人会との交流の場では、シンガポールで物流の会社に勤める方が、仕事に関わる交渉や現地の職員の人々とは英語でのやり取りが基本だとおっしゃってたりしました。先に述べたように、私は英語を活かせる職種というのは限られるものと思いましたが、それは自分の無知さから生まれた偏見でした。この研修を通して様々な業界を自分の目で見たり、最前線で活躍する方のお話を聞いたり、現地の人々と楽しく会話したりして、実際に経験したからこそ、そのことに気づくことができました。農業や教育、食や物流など一見言語が直接関係しているようには思えない業界でも、それは確かに密接に関わっていました。

また、私は実際に異なる国の人々と関わる中で、共通の「何か」があるとその距離が一気に縮まることを実感しました。共通の知識であったり、経験であったり、何でも良いのですが、私の場合はそれが言語だと思いました。完璧に話せなくてもお互い少しその言語を話せる、知っているというだけでその人との繋がりができたように思えたからです。

この研修を通して今まで考えてこなかった言語と他の何かの結びつきをたくさん学び、言語がただ会話のためだけに役立つものではないことに気付かされました。これからは自信を持って外国語の勉強を続け、自分にだけだからできるその生かし方を考えたいと思います。

Global Wings

2024

Group

1

## 現地での出会いと自分の変化

石橋 紀歩

九州大学



今回の海外研修で、自分の目で町の様子を見ることや現地の人々と交流することを通して、異文化の土地を訪れる意義を実感した。この経験は、自分の視野を広げ、海外志向を強めたように感じている。以下に、私が海外研修を通して心に残ったことや自分の中に生じた変化について述べる。

最も印象に残っているのは、カンボジアの発展と格差の様子だ。初日午後には首都プノンペンに到着すると、整備された道路沿いに高層ビルが立ち並び、道路には高級車が走っていて発展が感じられたが、一方で格差も見られた。2日目、シムリアップへ移動するため町を離れると、地平線まで続く田んぼが広がっていて、道路沿いに現れる高床式の集落では、裸足の子どもが遊んでいた。さらに、発展した都市の中にも違和感があった。イオンモール3号店のお洒落な店舗や巨大な規模から発展を実感した一方、閑散とした雰囲気や手持無沙汰な店員の姿に驚いた。発展が現地のニーズに合っているのか疑問を感じた。この違和感は現地を訪れて初めて得られた学びだった。

この海外研修を通じて、気持ちにも大きな変化があった。まず、英語力向上へのモチベーションが大きく高まった。BTECやHOCで現地の子どもや学生たちと交流し、人との関わりが自分に与える影響の大きさを実感した。カンボジアでの出来事が一気に自分事になる感覚があった。この経験を経て、もっと多様な人と交流したいという思いが強くなり、英語学習に対する意欲が上昇した。海外研修では、

BTECの学生との会話など、自分の英語力の未熟さを感じる場面が多々あった。学生の一人とは日本帰国後も連絡を取り合っており、彼女の英語力や学ぶ意欲から刺激を受けている。彼女とのやり取り以外にも、英語の実践の機会を増やし、英語力を伸ばしていきたい。また、安全面でハードルを感じていた東南アジア旅行への抵抗感が薄れ、新たな地域へ行ってみたいという意欲が高まった。この研修は、自分の視野を広げ、固定観念を見直す貴重な機会となった。

長期間滞在していたこともあってカンボジアにフォーカスした報告書になったが、シンガポールでも多くの学びを得た。例えば、JETRO訪問や県人会の方々との交流会を通じて、日系企業に就職したとしても海外で活躍するチャンスがあるということを実感した。自分の将来のキャリアについて考える上で重要な感覚になったと思う。

以上に述べたように、私は今回の海外研修を通して、異文化の土地を訪問して得られる学びや自身に起こった変化を感じた。まだ訪れたことのない場所に行き、人々と交流したいという思いが強くなった。この経験を活かして、来年行く予定の長期留学を含め、フットワークを軽くしていろいろな場所を訪問し、成長の機会を積極的に求めて行きたいと思う。

Global Wings

2024

Group

2

## ーグローバルな視点とは何かー

山本 健志

九州大学



「このプログラムでグローバルな視点を心得、福岡県に何を還元しますか?」

応募時の面接で聞かれた質問の一つ。この質問を受けた時、グローバルな視点を持つのは福岡のためなのか。正直あまりピンときませんでした。しかし、事実としてこの時の私は自分がより多くの海外経験を積むことだけに意識が向いていました。だから、単に自分のやりがいや面白さだけでなく、グローバルな視点を持つことに対する自分以外の多様な観点からの意味を探ること。これを参加の目標にしました。

第五次研修までを振り返ると、グローバルな視点を持つ意味について考える貴重な経験がすることができたと思っています。面白かったのは多種多様な領域でグローバルに活躍する方々と直接会って対話できた点です。技能実習から海外駐在、観光業、輸出事業、公益財団法人、現地NGO、地方自治体、日本大使館、現地政府、JICA、JETRO、国連まで。これだけさまざまな立場の関係者と対面で話す機会があるのは福岡県という公的な立場で活動するこのプログラムならではの魅力だと思います。

このような日々を重ねる中で二つのことを発見しました。今回の研修を通じて出会った方々は活動の立場も規模も全く異なっていますが、国や地域にとらわれず最適な環境を追い求める広い視野を持って活動していました。私たちの多くが国や地域にとらわれているのではなく、「自分たちの活動にグローバルな視点は関係がない。」と

いう立場や活動規模、内容に対する思い込みにとらわれているのではないかと気が付きました。情報収集や自分の立ち位置を捉えるのに今の立場や活動規模は関係なく、広い視点の中に自分を置くだけで選択や行動が変わると感じました。その一方で、視点を広くしたからといって特別なことをする必要がないことにも気が付きました。このプログラムでは半年という時間で大小たくさんの活動を行ってきましたが、自分一人の力でできたことはごくわずかでした。しかし、成果報告を終えた今、グローバルに活動してきた研修の面白さとそれを経験できた意味は大きいと感じます。海外でいつもよりアンテナを張っていたためよく覚えている。仲間とのたわいのない話や小さな気づきの共有が一人で成せないことを成すのにどれほど重要か気が付かされました。

グローバルな視点とは何か。日本対海外のものでもなければ、海外から取り入れる一方方向のものでもない。特定の誰かだけが持つものではなく、一人で持つものでもない。人との繋がりの中でこそはじめて、成長、実践において大きな価値を生むものだ、自分の中で捉え方が変わった日々でした。領域、規模、立場に関わらず視点は広く、それを踏まえて、小さな繋がりや連鎖から大きな可能性を創る。この学びを自身の経験の中で得られたことが今回の研修の一番の成果です。

Global Wings

2024

Group

2

## 一期一会

NGUYEN THI DIEM THUY

松本工業株式会社



HOC孤児院へ訪問した時に、運営者の岩田さんに対する子供たちの行動や言葉遣いを観察すると、身内のような関係だと感じた。自分の子供ではないのに、どうやってその関係を作って、維持できるのかと考えた。単に学校へ行かせるだけではなく、安定して生活するには、レストランも運営している岩田さんは見えないところで、きっと沢山の苦勞をしていると思う。しかし子供達の為に一生懸命努力している。その姿を見ると、誰かの為に一生懸命知恵を絞って、行動する事は本当に美しいと感じた。

そして、HOCで出会った子どものマリリアさんの事は忘れられない。マリリアさんは日本語がとても上手で、日本語能力試験N2を受ける事を決意したそうだ。そういう努力している人材を私は出来るだけサポートしたい。しかし私だけでは力不足だから、教育に興味を持っている方を探して、一緒にサポートの方法を考えながら行動したいと思う。

岩田さんは一人ではなく、同級生や多くのサポーターから支えられて、HOCの子供達を応援している。一人だと無理な事があるので、お互いを支えながら、より良い結果を出す事が一番重要だと思う。

カンボジアでは識字率の低下と、貧困のせいで途中で退学する問題がまだ残っているため、現在の教育状況を把握する為に、実際の調査を行いたい。小学校などへ行って、一緒に授業を受ける事を通して、通学する人数や先生の教え方などを理解できると思う。それに学

校へ行っている子供の家庭へ訪問する事で経済面、子供の教育の仕方、衛生管理面などの話を聞きたい。

また、シンガポールの福岡県人会で聞いた話も印象に残っている。シンガポールの小学生にとって英語と中国語は必要である。私は日本で働くから日本語だけで十分と思うが、今は「グローバル社会」なので、日本語だけでは自分の可能性が制限される気がする。自分の可能性を広げる為に、英語を学ぶ事は一つの方法だと感じた。

私達は日本の文化と社風などに慣れているが、急に生活と働く環境が変わると、「臨機応変」に対応できるかと聞かれたら、「はい!」とはすぐに答えにくいと思う。

他国と異文化のグローバルの環境で溶け込む為には、言語だけではなく、その国の働き方の理解なども大事。そしてどんな事が行われても、対応出来る様に臨機応変のスキルアップも不可欠である。福岡県人会との交流のおかげで、日本社会に居る自分の存在意義を改めて考えさせられた。福岡県の事を世界の人人に知らせる為にもっと努力しないと決意した。

## 出会いに感謝

丹下 紗希

熊本大学



私が参加を決めたのは、他国の教育について興味があったこと、何か新しいことに挑戦し、もっと自分の視野を広げたいと思ったことがきっかけでした。研修期間、講演で貴重なお話を聞いたり、団員とのディスカッションを行ったり、全ての時間がとても刺激的でした。

研修の中で、特に自信を持って頑張ったと思えることがあります。それは、海外研修前の、「カンボジアの平和教育の普及と、日本のこれからの平和教育」をテーマにした自主研究です。この研究を通して、カンボジアの歴史を学ぶところから、日本とカンボジアの平和教育の現状や課題を調べる中で、そもそも平和教育って必要なのか?など様々なことを考えるきっかけとなりました。最終的には日本のこれからの平和教育へ4つの提案を考えました。研究を終えても、まだ納得のいかないところや、まだまだ勉強不足だと感じるところがたくさんあり、これからさらに学びを深めていきたいと思っています。

次に研修を通して、自分の中で大きな学びの一つに「ソーシャルビジネス」があります。私は今まで「国際協力」や「社会貢献」と聞くと、ボランティアを強くイメージしていました。しかし、ビジネスとして関わることで、収益を得て持続性を高めることができるという視点を、研修の中で持つことができました。

カンボジアでの研修で印象に残っていることはHOCにいる子どもたちとの交流です。お菓子を食べる際にも、必ず半分に分けてくれる純粋で優しい子どもたちでした。そんな子どもたちと一緒に遊んだ

り、折り紙をした時間は本当に楽しく、またいつか子どもたちと関わりたいと思いました。

シンガポールでは海外研修最終日にフードバンクのボランティア活動を行いました。自ら、お年寄りの家を訪ね、食料を渡すのは、人見知りの私にとっては勇気がいることで、きっと今までの自分であれば、避けていたように思います。しかし、勇気をもってお年寄りの方に食料を渡し、お礼を言われた時に、役に立てたことへの喜びと同時に、この研修を通しての成長を感じ、自信につながりました。このように成長ができたのも、常に多くの刺激と気づきを与えてくれた尊敬する団員のみなさんのおかげだと思います。団員、HOCの子どもたち、BTECの学生、県人会の方々、ご講演いただいた皆様、すべての出会いに感謝しています。研修期間中、自分の無知さを痛感する場面が多くありました。これから、もっとたくさんの知識をつけ、様々なことに挑戦し、常に視野を広く持てるよう努力していきたいです。

## 研修を通して見えてきたもの

中瀬 雄大

福岡大学



私がこの研修に参加した理由は、海外を経験したいという昔からの夢があったからです。海外は文化や生活、考え方で日本とは違うところがあり、学ぶべきことがたくさんあると本で読んだことから、自分の目で実際に確かめたいと思っていました。

今回の海外研修で心に残っていることの一つは、カンボジアのポテンシャルの高さと、シンガポールの格差社会についてです。

まずカンボジアについては、発展途上国であり危険な国だという話をよく耳にしていたので、とても不安がありました。いざ行ってみると主要な街はきれいで舗装をされた道路など随所に発展を感じられ、人々の様子も皆生き生きとしていて、フレンドリーな人が多く、とても好感が持てました。発展しきれないのはどうしてだろうと疑問に感じましたが、研修で地雷除去活動家のアキ・ラーさんから話を聞くうちに、地雷が発展の妨げになっていることが分かりました。カンボジアでは今でも多くの地雷が埋まっており、私たちが何気なく歩くような道でも、カンボジアでは命がけの道である状態ということでした。また、カンボジアの主要産業は農業ですが、農地を広げるにも、地雷が埋まっている可能性があるため安易に行う事ができないことから収入を増やすことができず生活が厳しい状態が改善されないことが分かりました。しかし、見方を変えれば、地雷さえ撤去できれば、これから大きく成長する可能性を秘めた国であると私は考えました。

次にシンガポールでは、フードバンク・ボランティア活動に参加しま

した。団地内に食べ物の配給を行いました。住んでいる環境があまりよいとは言えない場所で、生活している人も

今日を生きるのに精一杯というような表情をしていました。国全体の生活水準で見ればカンボジアなどの発展途上国と比べてよい環境ですが、国内の格差はとても大きく、本当に必要な支援は、貧困層に対する社会的支援や精神的ケアではないかと感じました。しかし、今私たちにできることは食べ物を渡すだけで、それ以上のことができないというところに自分の無力感ややるせなさを感じながらの活動となりました。

今回の研修を通し、自分がこれから社会や世界に対して貢献するためには、広い知識と人脈を築かなければならないことがわかりました。そのため、これからの生活の中で一歩一歩努力を重ね、いずれは今回学んだ地雷問題について解決のための取り組みを行っていきたいです。

Global Wings

2024

Group

2

## アジアを学び、福岡の未来を描く

末吉 鼓太郎

株式会社福岡銀行



福岡県はアジアの玄関口として、九州・沖縄地方における経済の中核を担う重要な地域です。私はこの地域の発展に寄与するために、アジア諸国に直接触れ、その経済や社会に関する知見を深めたいと考え、本研修への参加を決意しました。

現地(カンボジア・シンガポール)での海外研修を通じて特に印象的だったのは、「貧富の差」が顕著であるという事実です。

まず、カンボジアの首都プノンペンを訪れた際、高層ビルが立ち並び、ショッピングモールや高級車が行き交う一方で、郊外に行くと貧しい生活を送る人々がいました。高床式の家屋で暮らす彼らの衣食住の水準は低く、豊かな生活とは程遠い状況でした。都市部と地方でこれほどまでに生活水準に差があることに、私は強い衝撃を受けました。

日本では「貧富の差」を実感する機会は少なく、格差の存在を直接体感した事は、私にとって非常に貴重な経験となりました。

一方、シンガポールでは経済成長が必ずしもすべての人々に利益をもたらすわけではないということを学びました。アジアにおける金融・経済のハブとして発展してきた国であることを象徴するような「マリナ・ベイ・サンズ」や「カジノ」などの存在に注目されることが多いですが、その裏には生活に困窮している人々がいました。実際に、フードバンクという団体が行う会員家庭に対して無償で食料を配布する活動に参加した際に、貧困層の生活水準の低さを目の当たりにしました。

2001年に「既に貧困は過去のもの」とシンガポール政府は宣言し

ているが、明らかに貧困層は存在し、政府はその存在に目をつぶっている現実に衝撃を受けたと同時に、経済成長は必ずしも全ての国民に恩恵をもたらせるものではないという事実、私は深く考えさせられました。

カンボジアやシンガポールで直面した貧富の差は、実際に現地に足を運び、そこでの生活環境や人々の状況を直に感じることで、初めて深く実感することができました。これまで、インターネットやAIを活用した情報収集、或いは他者の意見や体験談を通じて物事の多くを学んできましたが、実際に現地へ足を運び、自分の肌で感じることの重要性を改めて実感しました。今後、物事を判断するには生きた最新の情報や感覚すべてを含めた上で判断することが必要であり、机上で思料を巡らせるだけでは最善かつ最良な判断は難しいと感じました。

本研修を通じて、様々な立場や利害関係が絡み合う地域社会の更なる発展に貢献するためには、単に経済や社会の仕組みを理解するだけでは不十分であり、異なる地域や人々の実情を直接理解した上で、複雑な課題に取り組むことが重要だと感じました。

今回お会いした方々とはご縁を大切に、学んだことを日々の業務や生活に最大限活かすと同時に、これからも学びを深め、日々成長していきたいと思っています。

Global Wings

2024

Group

2

## 研修を通して考える本当の「幸せ」とは

宮本 美咲

山口大学



私がこの研修に参加した理由は、将来、教育の分野で外国にルーツをもつ子どもたちに関わって働くために、多様な文化に理解をもちたいと考えたからです。そしてこの研修を経て、期待していた経験はもちろん、団員や現地の人々とのつながりと、新たな視点も得ることができました。

今回の海外研修では、同じ東南アジアでも全く異なる、カンボジアとシンガポールを訪問しました。カンボジアでは児童養護施設HOCを訪問し、子どもたちと交流しました。実際に子どもたちと出会って、私はまず「みんな幸せそうだな」という印象をもちました。同時に、第1次研修・第3次研修ですでにHOCについて学んでいたにも関わらず、カンボジアで孤児院にいる子どもたちは、「不自由な暮らしをしているのではないだろうか」、「幸せなのだろうか」という疑問や偏見をもっていったことに気付きました。しかし、一緒に遊んだり、料理をしたりしていると、子どもたちの愛らしい笑顔や無邪気さにたくさん触れたことに加え、ボランティア勤務をしている岩田さんの子どもたちに対する愛情や、子どもたち同士仲の良さから、普段からHOCで楽しく幸せに暮らしていることが見て取れました。そして、子どもたちの暮らしに対して疑問や偏見を無意識にもっていた過去の自分を恥じました。

また、キングフィールドの視察や、アキ・ラー地雷博物館への訪問から、カンボジアではポル・ポト政権での出来事を学校では教えていないことを知りました。ガイドのパークンさんの話によると、ポル・ポ

ト政権の支配はたった約50年前の出来事であり、当時の兵士が生きている現代において、学校では教えられないそうです。歴史を教えないことが、今を平和に暮らすための方法だという、今の日本とは異なる平和教育のあり方を学びました。

シンガポールへ行くと、高層ビルが建ち並びながらも緑と共存している街並みに魅了されました。よく磨かれた綺麗な外車が道を走り、百貨店には高級ブランドがたくさん並びという光景は、国の豊かさを誇示するようでした。しかし私たちがフードバンクのボランティアを行った場所は、コンクリートの壁で囲まれた暗い部屋が無数に並び集合住宅で、私が知っていたシンガポールの豪華な街並みとは対照的な景色でした。そのような貧富の差がある中で、ビジネスで成功し、富を得ることが「幸せ」なのか、歴史を学校で教えない方が「幸せ」なこともある、そんな様々な「幸せ」のかたちを目にし、自分にとっての「幸せ」は何か考えるきっかけにもなりました。まだその答えは出ませんが、これから見つけていきたい課題となりました。

約3ヶ月かけた研修を通して得たものは、インターネットで調べるだけでは得ることができないものばかりで、自分の糧になったと確信しています。これからもこの経験と出会いを大切に、自分が社会に貢献できることと向き合いたいです。

## 海外の教育現場から学ぶ日本の教育の現状

橋本 萌花

佐賀大学



この研修における私の大きな目標は、海外における教育現場の視察や海外で活躍する日本人との関わりを通して、視野を広げ、学んだことを日本の教育現場に生かすことでした。

海外研修の中で特に印象に残ったのは、HOCとバタンバン教員養成大学(BTEC)への訪問です。現地を訪れるまで、頭では「困っている子どもたちのために何が出来るのか」という視点で考えている自分がいました。しかし、その考えは浅はかでした。というのも、HOCで出会った子どもたちもBTECの学生も、困っているどころか明るく元気で優秀な人たちがばかりだったのです。

HOCでの交流では、公用語であるクメール語に加え日本語も流暢に話す子どもが何人もいました。折り紙でオリジナルの作品を作ったり、大縄跳びの新しい遊び方を生み出したりするなど、発想が豊かな子どもたちや、団員たちの髪を結んでくれる子どもたちもいました。日本の子どもたちと何ら変わらないのです。また、たこやきと餅を作り皆で食べる活動では、とある女の子が餅やたこ焼き、現地のおやつを団員たちに分けてくれました。実際に関わることで、「困っているから」「大変そうだから」ではなく、純粋に「もっとHOCを含む色々な国の子どもたちと関わりたい」と思うようになりました。

BTECでの交流では、学生の英語力に驚きました。学生たちとの交流で皆さんは英語を流暢に話していました。例えば、アプサラダンスの難しい動きを全て英語で流暢に説明したり、昼食で普段の生活や

将来の話や英語で会話したりしていました。日本の大学生、特に同じ教育大学や教育学部の学生たちはどうでしょう。英語の成績はよくても実際に会話をするのは難しいという学生が多いと思います。そのため、むしろ日本の方がカンボジアの英語教育を見習うべきなのではないかとすら感じました。

他にも様々な場所を訪問する中で、教育に限らず多くの分野でカンボジアやシンガポールという国の状況を知り、これまでなかった「国際的に物事を考える機会」が多く、自分の視野が広がったと思います。この研修で学んだことや気付いたことは、来年度から福岡県の教員として働く際に生かします。児童と接する中で、海外にルーツを持つ児童や特別な配慮を必要とする児童等の支援の手立てを考える上で多様な視点で考え実施するとともに、研修で学んだことや感じたことを児童に伝え、国際的な視野を持つ児童を育てていくという形で福岡県に還元していきます。

## ポテンシャルの国 カンボジア

佐伯 幸歩

立命館アジア太平洋大学



私は、個人旅行で訪れるような観光スポットだけでなく、その地域に住む人々と直接関わることが出来る点に魅力を感じ、この研修に参加した。海外体験はほぼ初めてであったが、多くの学びを得ることができた。その中でも特に印象深かった出来事を2つ挙げる。

1つ目は、HOCでの学びである。HOCにいた子どもたちは初対面にも関わらず、とても親切で気遣いを見せてくれた。言語の壁があったものの、一生懸命と一緒に遊ぼうと誘ってくれる姿が印象的であった。滞在中、3人の女の子たちが代わる代わる私の髪をヘアアレンジしてくれたことも心温まる経験であった。他の団員もアレンジしてもらっていたが、その技術は非常に高く、専門的な環境で学ぶ機会があれば日本の美容院で働けるのではないかと思えるほどであった。他にも、幼いながらもサッカーが非常に上手な子どもたちなど、多くの可能性を秘めた子どもたちがいた。幼い頃から日本よりも厳しい環境下に置かれて育ったことで、早いうちから自分のことを自分でできるようになり、技術が磨かれたのだと考える。

しかし、HOCの代表である岩田さんの話によると、カンボジアでは政府が孤児院を公認しておらず、運営が寄付によって支えられている現実を知った。この事実に触れ、物質的な支援だけでなく、どうしたら継続的な支援に繋がるのかや、そのために日本にいる私たちに何が出来るのかを深く考えさせられた。

2つ目は、カンボジア人の言語能力である。アンコール遺跡やナイ

トマーケットといった観光地では、日本語が非常に流暢な現地の人々が多く見られた。最終日に訪れたバタンバン教員養成大学で、現地の大学生から聞いた話によれば、観光地周辺に住む子どもたちは観光客の会話を耳にしながら育つため、読み書きはできなくてもクメール語以外の言語を聞いて理解することができるそうだ。この話を聞くまでは、観光業のために外国語を学んだのではないかと考えていたが、実際には生活の中で自然に身についた場合もあることが分かった。また、現地の人々に親日家が多い背景には、観光業や土地開発における日本からの支援や、日本人観光客が多く訪れていることが関係しているという。

これ以外にも多くの学びがあったが、大学生の私にできることは知識を蓄え、勉強を続けることであると感じた。今回得た学びはカンボジアでの研修が無ければ知らなかったことだ。今後は日本だけでなく海外の現状にも興味を持って、今回の経験を何らかの形で人々の役に立てるよう活かしていきたい。

## 福岡県グローバル青年の翼 ～アドバイザーとして参加して感じたこと～

福岡女学院大学 中島 優香



昨年、団員として本研修に参加した私は、今回アドバイザーとして国内研修・海外研修すべてに同行した。本稿では、アドバイザーを志望した背景や今回の団員の様子・学びについて述べたい。

昨年の研修では、アジア諸国の力強さや、教育制度、歴史について多くのことを学んだ。その中で特に印象に残っていることは、カンボジアのBuddhism for Social Development Action (BSDA) で知った、「ピアサポートシステムの構築」である。BSDAが掲げるピアサポートシステムとは、困難を抱える学生が職業訓練や教育を受け、自身と同じ境遇にある人を助けたり、支え合ったりすることで、カンボジアのよりよい未来を創造する取り組みである。この取り組みにより、教員やボランティアの不足といった課題解決に繋がっているようだ。この学びを受け、前回研修に参加した自らの経験を活かし、その学びを次の世代に繋げられる、団員と年齢が近い立場から、同じような目線で団員をサポートできると考えた。

グローバル青年の翼は「郷土を知り、世界を知り、グローバル・ビジネスを体感する国際的な視野を持ち、地域で活躍する人材を育成するために、社会人と大学生がともに活動する」事業であり、学生だけでなく様々な人々と意見交換し、交流できる場と考える。研修中、団員同士のコミュニケーションから新たな発想やアイデアが生まれる場面を数多く見た。私は、この場の大切さを実感し「次の団員も安心して活動できる場を作りたい」という思いから、アドバイザーとしての参加を希望した。

今年度の団員の様子は、昨年度の私たちと似て、初日は緊張している面持ちだったが、研修が進むうちに緊張も解け、ワークショップ以外の場面でも活発に会話するようになった。班別発表では発表者、まとめ役、意見を出す役割など自然と分担され、スムーズな議論が展開されていった。

海外研修前に、団員より「海外に持っていくべきもの」に関する質問があった。これをきっかけに、団員の不安を軽減することと、昨年度と今年度の団員の繋がりをつくることを目的に「海外研修で気を付けるべきこと・持参してよかったもの」をまとめた資料の作成を行った。まず、昨年の参加者に協力を求め、意見を集約した。その後、内容を修正・整理して今回の団員に共有した。共有後、アドバイザーに対して気軽に相談できる雰囲気生まれ、団員からの質問や相談が増え、「アドバイザーの役割を果たせている」という自信を得た。

海外研修では、昨年と異なる視察先も多く、私自身も団員と共に新たに学ぶ機会があった。初めての場所で、初めて出会う人々との交流に積極的に取り組む団員の姿に刺激を受け、私もここでしかない出会いを大切に、積極的に参加しようとする意識を新たにした。また、アドバイザーとして団員の点呼や健康管理など運営面でのサポートをし、無事に帰国することができた。この経験は私にとって貴重な財産となるだろう。

今年初めて導入された「アドバイザー」という役割を担い、団員と事務局の橋渡し役、団員が安心して参加できる環境づくりができた。この経験を活かし、今後も福岡への貢献の第一歩、一助となるよう励みたい。

## 昨年度と今年度、両者から得た人間力

西南学院大学 藤本 晴貴



私は、昨年の研修にも参加しており、今年の研修は「アドバイザー」という立場で、二回目の参加となった。故に、今回は昨年ほどの不安はなく、昨年に得られた仲間との交流や、現地で培った学び、知識を糧に、邁進してきた自分の成長を実感することができた。しかし、困難に感じる点も多々あった。主に、昨年と違い、団員ではなく事務局を補助する立場という点、海外研修前の団員との交流不足という点だ。

研修が始まって初日の顔合わせの際、昨年同様、団員間でどこか緊張した様子が見受けられ、親近感を覚えた。私はアドバイザーとして、また、海外研修に同行しないことを考慮して、団員間の交流を妨げないよう、目立ちすぎずにアイスブレイクを進めることが自分の役割であると判断し、控えめにサポートするようにした。しかし、研修が進み、団員間の不安が解消されるにつれて、積極的な発言が多く飛び交うようになり、その必要性があまりないと気づいた時、向上心の高い団員たちと比べて、大して何もできていなかった自分に焦りを感じた。また、この焦りにより、アドバイザーとして参加している自分が、事務局に何を期待されているのか、初めて深く考えるきっかけになった。

初回の研修を経て、団員間の交友も深まり、研修が順調に進んでいくと思われていたが、当初国内研修のみ参加予定だった私も急遽海外研修に同行することとなった。故に、役割をきちんと果たしていたもう1人のアドバイザーと比べて、自分も同じようにできるだろうかと不安になっていた。

しかし、怯えているだけでは何も始まらないと昨年の研修を経て学んでいた。そのため、団員個人と密にコミュニケーションを取ったり、団員間で交流する場を主体的に多く設けたりするように努め、また海外滞在時の注意すべき点を団員へ共有するなどのサポートも行った。その結果、団員間の深い交流を促すことができたと共に、私個人としても気づきがあった。私は、年代関係なく、どんな人とも友好的に接することができ、人と人の上手に取り持つことができるようになっていた。特に、シンガポールで年上の県人会の方々との交流をした際に、この強みを生かすことができた。また、自分が得た経験や考えを、客観的な立場で意見できるようになった。これは昨年、自分が一番未熟であり、小さなことで頻繁につまづいた経験があったからだ。故に、他者の悩みを詳細に理解することができ、個人々に合わせた解決方法を考えることができた。これは、アドバイザーを通して得た学びでもあり、これからの私の強みになると確信している。

研修を経て、私はこれからも恐れることなく、自分の可能性や在り方について模索していきたい。そのように思えた良き研修となった。

## 事務局から一言

福岡県 人づくり・県民生活部 私学振興・青少年育成局 局長 坂田 茂樹

私自身、これまで8か国・地域を旅しましたが、今回のカンボジアとシンガポールは初めての地。団長という立場ではありませんでしたが、保護者のような感覚で団員を見守ることに徹しました。

第1次研修では、同じ釜の飯を食うことから始めようと、メニューを考え、一緒に調理して食し(オイスカの職員と間違った人もいたと思いますが)、研修を一部受講しましたが、「みんな大人しいな」というのが第一印象でした。

海外研修では、早朝から遅れることなく集まった福岡空港で、既に団員間で交流ができており、現地では、連日、夜遅くまで語り合っていたことを聞いて、「みんな若いな」と、ひとり年を感じておりました(体調不調から奇跡的に回復したのは、皆さんからパワーをもらったかもしれません)。

そんな中でも、研修の行程は、手を抜くどころか、予想以上の成果を上げてくれたと感じております。日本に居たら気付かないことを多く学び、同じ志で参加した仲間という財産を得て、これからの長い人生、今回の研修はきっと役に立つ日が来ると思います。今後の団員の皆さんの飛躍に大いに期待しています。



福岡県 人づくり・県民生活部 私学振興・青少年育成局 青少年育成課 山本 越彰

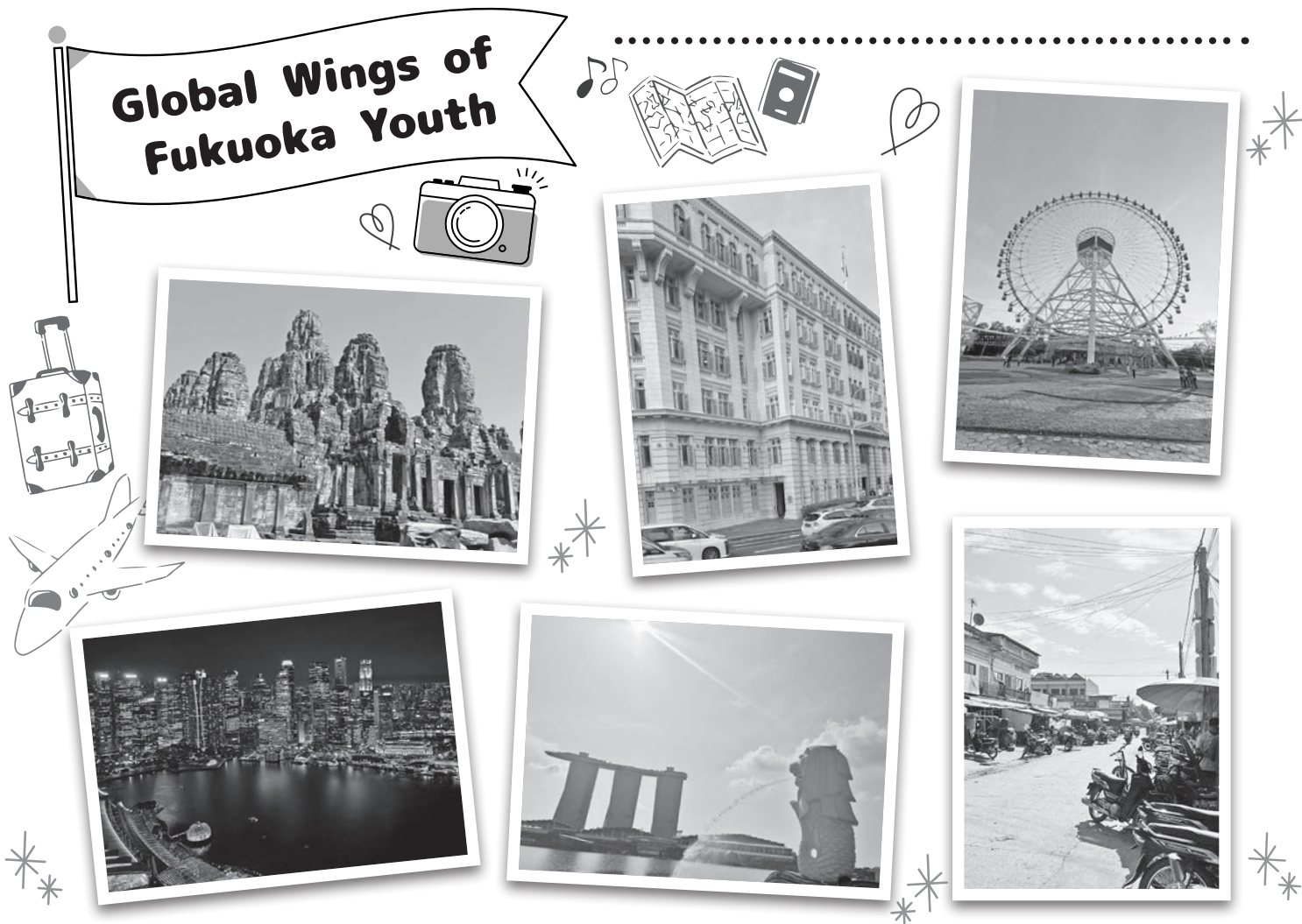
今回、県職員になって初めて、事業の一環で海外に行くこととなりました。それぞれ、特別英語が得意なわけでもなかったため、私個人としての不安もありましたが、年長者として皆さんをしっかり引き連れていこう心掛けたつもりです。皆さんからどう映ったかは定かではありませんが、とにかく無事で、そしてしっかりと今後の弾みになるような研修になったと感じていただけたならば、とてもうれしく思います。

団員の皆さんについては、面接時の立ち合いより見ていましたが、私個人の目からも皆さんの成長を大きく感じます。事前・事後の研修、そしてカンボジア、シンガポールの海外研修とともに、皆さんの協力・団結のおかげで、他にない経験と今後も絶えることない結束に繋がったのではないかと思います。

もちろん、この事業で経験したことは貴重かもしれませんが、皆さんが成果を発揮するのはこれからです。ここで新たに築いた絆を大切にしながら、皆さんの将来だけでなく、後輩やその次の方々にも皆さんの経験や実績を繋いでいけるよう、地域で活躍いただきたく思います。この度はありがとうございました。



Global Wings of  
Fukuoka Youth



# 第6回福岡県グローバル青年の翼 Global Wings of Fukuoka Youth 2024

## 募集要項

### 1. 目的

県内青年に、世界（アジア）を舞台に県内の企業や団体が活躍している現状を体感、認識させることで、国際的な視野を持ち、職場や団体等の中核的存在として地域で活躍できる人材を育成する。

### 2. 主催

福岡県グローバル青年の翼実行委員会（以下「実行委員会」という。）

### 3. 事業内容

(1) 募集人員 19名

(2) 全体の研修スケジュール（予定）

- ① 第1次研修（宿泊又は通所）…9月21日（土）～22日（日）  
県内NPOの国際協力活動・海外の施策等についての講義等
- ② 第2次研修（フィールドワーク・自主研究）…①と③の間  
海外訪問先に関連する県内企業・団体等への視察、研究
- ③ 第3次研修（宿泊又は通所）…10月19日（土）～20日（日）  
訪問国及び訪問先に関する講義・英語スピーチ指導
- ④ 第4次研修（海外研修）…11月7日（木）～14日（木）8日間  
現地企業や教育機関、文化施設の視察、現地で活躍する日本人との交流等
- ⑤ 第5次研修（宿泊）兼報告会…12月7日（土）～8日（日）  
海外研修レビュー・報告会等  
※研修日程については、研修効果を高めるため変更になる場合があります。

(3) 海外研修

日時 2024年11月7日（木）～14日（木）8日間（予定）  
訪問先 カンボジア（プノンペン、アンコールワットなど、複数都市）、シンガポール  
※訪問国は、国際的な情勢等により変更になる場合があります。

### 4. 募集

(1) 募集人員 19名程度（実際の団員数は募集上限を下回る場合があります）

(2) 募集締切 2024年6月23日（日）

(3) 応募資格 ①～④のすべてに該当する者

- ① 県にゆかりのある、2024年4月1日現在、満18歳～35歳の者
- ② 企業・大学・青少年団体・NPO団体・自治体等に所属・在籍する者で、国際的な視野を持ち、職場や団体等の中核となって活躍することを目指す者
- ③ 過去2年間（2022年度以降）のうちに国・地方公共団体等の公的経費（一部助成を含む）によって海外派遣事業に参加した経験のある者、国又は地方公共団体の議会の議員の職にある者は除く。
- ④ その他  
・研修計画に従い海外研修等の活動が支障なくできる健康状態であるとともに、規律ある団体生活に耐えられる者  
・第1次研修から第5次研修及び報告書作成までの全てのプログラムに参加できる者

### 5. 応募方法

下記の書類をとりそろえ、県簡易申請システムを用い、申し込むこと。なお、書面で郵送又は持参する際には「12. 問い合わせ先」記載の所在地に送付又は持参すること。

#### 【必要書類】

- ① 参加申込…様式1又は県簡易申請による
- ② 勤務先所属長の承諾書（ただし被雇用者のみ）…様式2
- ③ 作文（様式自由）  
応募動機と併せ、この研修で何を学びたいか、研修後、成果をどのように活かしたいか等を具体的に記述すること。  
・ワードファイルにおいて、1,200字程度  
・縦A4判横書きとし、タイトル及び氏名を明記すること（タイトルは自由）

#### 【応募期限】

電子申請 6月23日（日）23時59分  
郵送 6月23日（日）消印有効  
持参 6月21日（金）16時必着

※応募へのリンクは「福岡県グローバル青年の翼」にて検索、右記二次元コード又は下記URLからアクセス可能  
<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/globalwing-portal.html>



### 6. 団員候補者の選考、決定

(1) 団員候補者の選考

選考	選考種目	配点	内容
第1次選考	作文	30	申込時の作文の内容を総合的に判断
第2次選考	集団面接	50	積極性、協調性について判断
	総合評価	25	集団面接から総合的に判断

実行委員会において、第1次選考を行い、結果を7月上旬までに本人に通知する。

第1次選考の合格者については、7月7日（日）（予定）に第2次選考（面接）を実施し、7月下旬までに内定者を決定し本人に通知する。

(2) 団員の決定

団員の決定は、第3次研修まですべて出席し、かつ団員としてふさわしいと認められる者について第3次研修終了時に行う。

※不適当と思われる者については、それ以後の研修参加を認めない。

### 7. 選考結果の開示

選考結果については、口頭により開示の依頼をすることができる。（下記参照）

対象選考	開示請求できる人	開示内容	開示期間	開示場所
第1次選考	受考者	順位、総合得点	選考結果通知日の翌日から3か月間	福岡県庁6階 青少年育成課（実行委員会事務局）
第2次選考				

なお、電話、はがき、メール等による請求は不可につき、受考者本人であることを証明する書類（学生証、運転免許証、旅券、マイナンバーカード（個人番号カード）、健康保険の被保険者証等）を持参の上、直接開示場所に来ること。

### 8. 経費・損害等の負担

(1) 次に掲げる経費については個人負担とする。

負担金	その他の個人負担経費
120,000円 (学生 100,000円)	県内研修に係る経費（交通費、食事代、宿泊費等）、パスポート取得に係る費用、旅行傷害保険料、海外研修に係る経費（県内旅費、一部の食事代・交通費、燃油サーチャージ、海外渡航に際し必須となる予防接種ないし検査費用等）

- (2) 負担金は、10月に実施予定の第3次研修前までに納入するものとし、納入後は原則として返金しない。なお、負担金納入の有無に関わらず、団員が自己の都合により辞退した場合に生じるキャンセル料等については、本人が全額を負担するものとする。
- (3) 研修中の災害、病気、事故、個人の不注意等で主催者の責めに帰さない理由によって生ずる団員の損害等については、主催者は責任を負わないものとする。
- (4) 海外渡航に際し必須となる予防接種ないし検査等がある際には、原則対応すること。なお、対応しなかった際に生ずる団員の損害等については、主催者は責任を負わないものとする。

### 9. 団員資格の取消し

- (1) 団員として不適当と認められる者（研修の無断欠席、研修活動を妨害する者など）については、団員資格を取り消すものとする。また、海外研修中における資格の取消しは団長が行い、速やかに帰国させるものとする。なお、帰国に要する経費は、取り消された者の負担とする。
- (2) 団員資格を取り消した場合、すでに実行委員会が負担した経費の一部または全部を取り消された者から返還させることができる。

### 10. 事後活動

当事業に参加した団員は、これまでの事業参加者で組織している「福岡県青年の会」に入会し、積極的に会の活動に関わっていくことが求められるほか、県からの事後アンケート等に対し真摯に対応すること。（研修後、毎年アンケートを実施する）

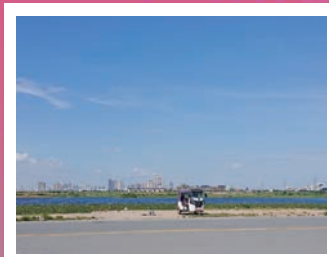
### 11. その他

本事業において撮影した写真・ビデオ等を本事業の広報、又は報告書の作成に利用することがある。

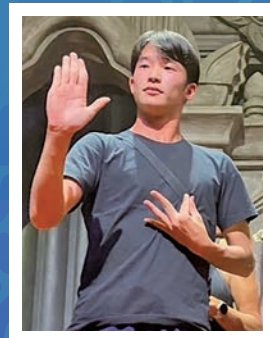
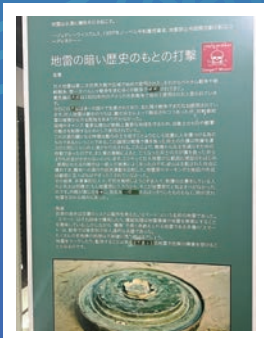
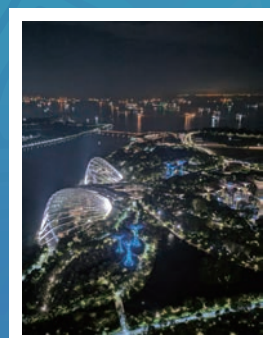
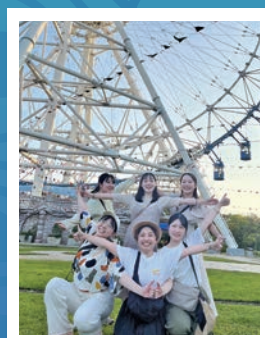
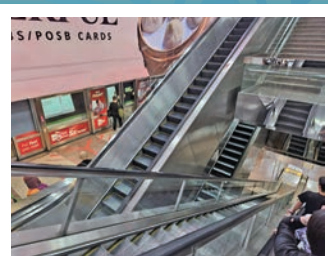
### 12. 問い合わせ先（応募先）

福岡県グローバル青年の翼実行委員会事務局  
〒812-8577 福岡市博多区東公園7番7号  
福岡県人づくり・県民生活部 私学振興・青少年育成局青少年育成課内  
電話 092-643-3615





## Snapshot with Message



# Snapshots with Message 1 班



カンボジアのナイトマーケットでマッサージを体験。  
研修の疲れが癒やされました。

青木 里花

カンボジア滞在中に見つけたヤシの木。  
葉は家の屋根、実は油、幹は木材と全て無駄なく  
利用できると。  
自然を活用したカンボジアの生活には驚かされました。

山本 夏鈴



BTECでの文化交流企画中の一役。  
青年の翼が計画した“日本のミニ運動会”はとて  
盛り上がり大成功でした。

榎本 真子



夕食会場でカンボジアの伝統舞踊のアプサラダン  
スを鑑賞！きらびやかな装飾と柔軟性のある  
動きがとて美しく圧巻でした。

釜本 一花



カンボジアでスーパーの帰りに初めてトゥクトゥクに  
乗ったときの写真！夜の風を感じながら道路を走る  
のがとて新鮮でした！

宮本 結衣





カンボジアの売店で注文したカエルの唐揚げです。日本で食べる鶏肉の唐揚げと遜色ない美味しさでした。また食べたい!!!

中嶋 陽貴

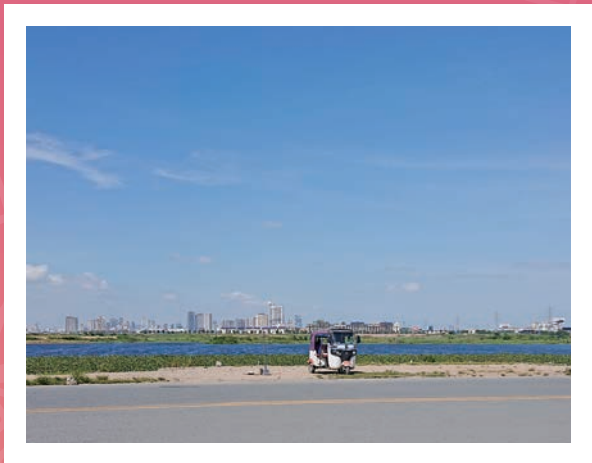
私たちのバスが見えなくなるまでお見送りしてくれたHOCの子供たち！  
また絶対会いに来るよ！

伊尻 秀徳



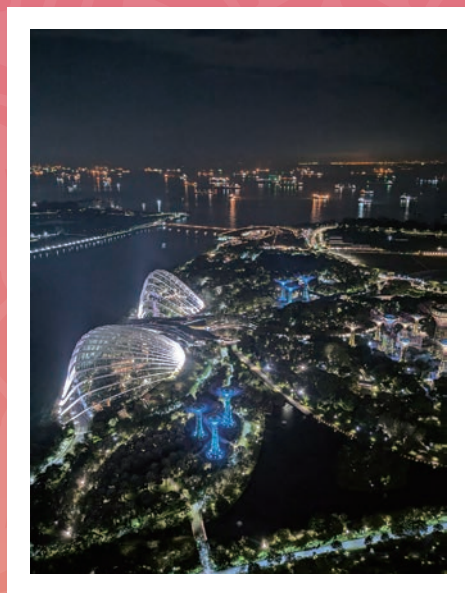
イオンモールから出てすぐの風景  
同じアジアであるはずなのに、目に見える発展の差が印象に残りました。

渡邊 裕加



マリーナベイサンズの屋上展望台からの景色！  
時間があまりない中全力ダッシュして見に行った甲斐がありました！

安部 エリカ



カンボジアのシェムリアップ空港で売られていたものです。  
クワトロスリな写真に驚き凝視していると、店員さんが「これはクワトロ。 (写真は) はがせるよ」と実際にはがして見せてくれました。日本との規制の違いに衝撃を受けました。

石橋 紀歩



# Snapshots with Message 2班



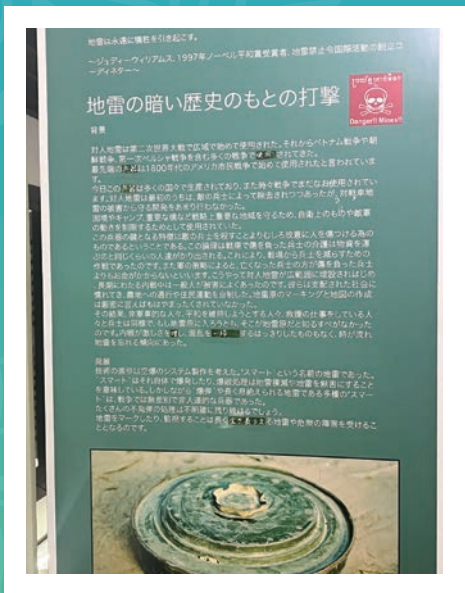
リユースされた観覧車。同じ北九州出身でした！  
山本 健志

カンボジアのあげたワモ。見た目は怖いけど、食べてみると意外に食べやすく、美味しかった。皆さんも今度行く時には是非チャレンジしてみてくださいね！おすすめ！

NGUYEN THI DIEM THUY

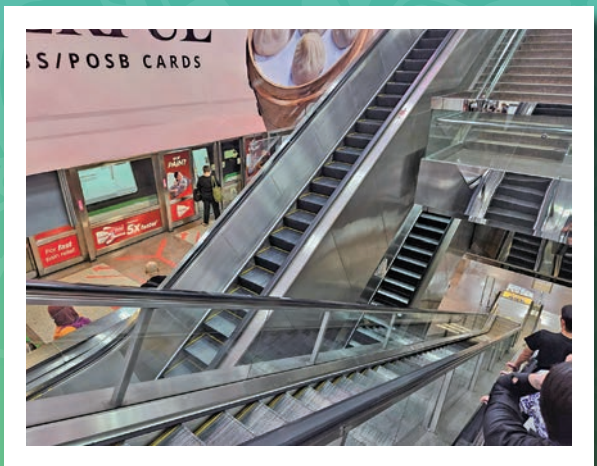


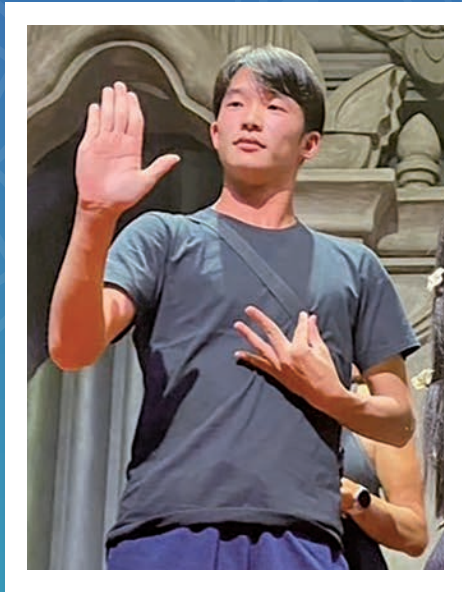
地雷博物館で日本語のパネルを発見！  
日本から支援を行う人たちがいることを知り、また一つ、日本とカンボジアのつながりをみつけることができました！  
丹下 紗希



シンガポールのエスカレーター  
日本の1.5倍速い！！  
こんなところに日本との違いが…

中瀬 雄大



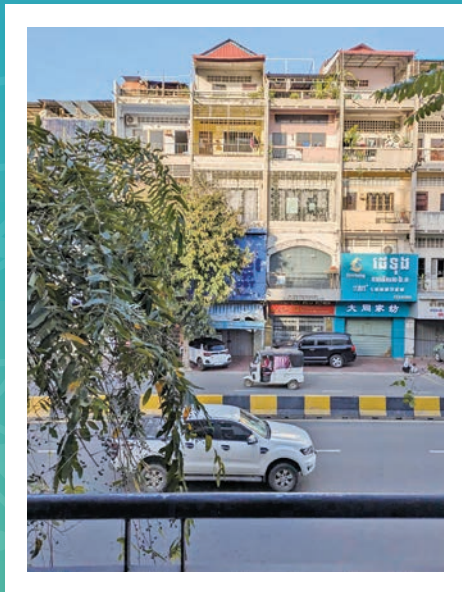


カンボジア伝統舞踊を観覧し、ポーズを真似て記念撮影したものです。指や手の角度を厳しく指導されました...笑

末吉 鼓太郎

屋台で売られていた虫を食べてみる団員と！  
夕ランチュラが一番美味しかったです！

宮本 美咲



朝、カンボジアで宿泊したホテルのベランダにて撮影。  
何気ない日常の街並みにどこか心を惹かれ、つい時間を忘れて眺めてしまいました。

橋本 萌花

幼い頃、家族と乗った思い出の観覧車に遭遇！  
スペースワールドからカンボジアに移転しました！

佐伯 幸彦



# Special Thanks to

## 国内研修の講義・視察などでお世話になった皆さま

研修	氏名	所属	
1次研修	荒牧 明楽 様	OVER THE RAINBOW	代表
	野見山 瞳 様	公益財団法人 日本財団国際事業部	
	森 祐次 様	公益財団法人 日本財団	常務理事
	豊島 茂 様	九州産業大学地域共創学部	准教授
	神田橋幸治 様	ビジネスデザインラボ	代表
3次研修	水谷みずほ 様	みずトランスコーポレーション	代表取締役
	Aldo Bloise 様	IKKYU合同会社	創業者
	Joelle Bloise 様	IKKYU合同会社	創業者
	後藤 伸也 様	独立行政法人国際協力機構JICA九州	企業連携課課長兼市民参加協力課企画役
	長根 寿陽 様	N-SYSTEMS株式会社	代表取締役社長
5次研修	川端 清隆 様	元国連本部政務官、元福岡女学院大学特命教授	
1・5次研修	廣瀬 兼明 様	公益財団法人 オイスカ西日本研修センター	所長
	満川 善雄 様	公益財団法人 オイスカ西日本研修センター	西日本支部主任
	公益財団法人 オイスカ西日本研修センターの皆さま		

## 海外研修の視察・交流会などでお世話になった皆さま

氏名	所属	
長根 寿陽 様	N-SYSTEMS株式会社	代表取締役社長
キー・ボトラー 様	カンボジア農林水産省	国務次官
聖川 健斗 様	在カンボジア日本国大使館	二等書記官
岩田 亮子 様	Hope Of Children	
高田 忠典 様	教育支援センターキズナ	代表理事
バタンバン教員養成大学の教員、学生の皆さま		
福岡県バンコク事務所の皆さま		
本田智津絵 様	ジェトロシンガポール	シニアアナリスト
中村 英人 様	シンガポール福岡県人会	事務局長
シンガポールの夕食交流会にご参加いただきました皆さま		

福岡県グローバル青年の翼にご協力をいただきました全ての皆さま、

**団員一同、心より厚く、熱く御礼申し上げます。**